
イリア・サロニケ（エト・エウトクタ外伝）

永良隆樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イリア・サロニケ（エト・エウトクタ外伝）

【Nコード】

N6836A

【作者名】

永良隆樹

【あらすじ】

少女は金髪のショートカット。少年のように帽子をかぶり、細面でどこことなく東洋系の顔立ち。男物のミリタリージャケットを着込んでいる。袖口から細い指先がほんの少しのぞいている。ボトムは砂漠色の迷彩パンツにコンバットブーツ。そしてオートマティクが二丁、ミニ・ウージー二丁、ポンプアクション式ショットガン一丁。戦う相手は、悪魔崇拝者の手により不当に蘇った死者。

シーン1〜5

シーン1 ロス

ロサンゼルス、ひと気ない倉庫。積み上げられた木箱の影に男は身を隠した。

エルゼルの奴らは全て殺した。残るは一人。だが奴は人間ではない。ゆっくりと近づいてくるその足音。拳銃のマガジンを入れ替える。焦って手が思うにまかせない。

男は太いジッポ（厚みは普通のジッポの倍、大きさも一回り大きい）を取り出し、中の綿を抜いて銃弾をみつつ詰め込んだ。ア二ナ、気付いてくれ。俺の弾は当たらなかった。だが、お前ならあるいは……。

足音がすぐそばで止まった。スーツ姿。長髪の日本人。青白い顔に鋭い目。

彼はオートマティックをかまえ、現れた男に向かって立て続けに撃った。男は避けるそぶりすらない。もう、見抜かれている。銃弾は全て命中したが、何事も起こらない。銃弾は全て男の体に吸い込まれた。敵の爪が伸びた。指先とともに。鉛色に変わっている。

その爪で彼のミリタリージャケットの襟をつかみひきおこした。サブマシンガンに握り替え、敵の腹部に無数の銃弾を撃ちこんだ。しかし、弾は全て敵の体に飲み込まれただけだ。服に無数の穴を開けただけ。何の傷も負わせることは出来ない。

「測上。サロニケは必ず貴様を倒す……」それが最後の言葉となった。

長い爪が喉を切り裂いた。後の言葉は声にならなかった。

ア二ナ……。娘の名。

シーン2 入国審査

シルバニア公国だって？ いったい何処の国だ。

差し出されたパスポートを見て係官は思った。なんとなく聞いた事はある気がするが、違う、アレはウサギの人形シリーズだ。

「お嬢さん、一人かい？」

少女は金髪のショートカット。少年のように帽子をかぶり、細面でどこことなく東洋系の顔立ち。男物のミリタリージャケットを着込んでいる。袖口から細い指先がほんの少しのぞいている。ボトムは砂漠色の迷彩パンツにコンバットブーツ。周囲に保護者らしき人間は見当たらない。

「保護者は？」

「いないわ」少女は平然と答える。

十六歳くらいに見えるが、パスポートには十三歳と書いてある。

「渡航目的は？」

「観光」そつけなく答えた。

「一人で？」

「ガイドブックがあるわ」少女が見せた本を見てますます目が点になった。その本の表紙には忍者が茶室に座っていて床の間に大仏みtainな仏像があり、天井には提灯がさがっている。その本に従えば間違いなく生きて日本から出られないのではないかと感じた。

しかし確かに観光ビザもちゃんとある。手荷物にも不審な点はない。たぶんホームステイの口だ。ロビーにはホストファミリーが迎えに来ているだろう。係官はそう思い、パスポートに判を押した。

「よい、旅行を」パスポートを返した。

「チャオ」旅券を受け取ると、少女は細い腕にバッグを担いで去っていった。

彼女の名はイリア・サロニケ・アニナ。ルーマニアはトランシルバニア山脈の奥深くにある小国、シルバニア公国の古い貴族の家柄の生まれ。彼女の家系は先祖代々、悪魔崇拝者やバンパイアを始末

してきた。イリアは爵位、サロニケは家名、アニナが名だ。

バンパイアとは本来の意味でのバンパイア。それは映画の吸血鬼などではなく、悪魔崇拝者達の儀式により不当な方法で蘇った死者、人間社会にまぎれている。で、大抵、悪魔崇拝者と絡んでいる。

一般的にバンパイアは銃で撃つても弾を避けるほど敏捷である。弾が当たっても平気な者もいる。十字架もにんくも聖水も効かない。バンパイアと呼んで、人がイメージするものとはまったく別物である。それは、パーフェクトを意味する。

シーン3 空港ロビー

ロビーに出ると微かにかび臭い空気が漂っていた。湿っている。雨でもないのに雨の臭いがする。

確かにカメラを持っている人が多いわね。チューインガムを噛みながらアニナは思った。みんな手に携帯電話持っているし。

ガイドブックに書いてあるとおりだわ。

礼節を重んじる武士の国、日本に来たのだ。にしては、なんとなく軽い雰囲気は感じるけれど。けれど、さっきの入国審査官も賄賂を要求しなかったし、誰にもチップをあげる必要はないみたいだ。チップではなく気持ちを渡すというのは本当みたい。

それにしても、空港に近衛兵の姿がまったくもないのも異質だ。いるのは民間人ばかり。広すぎるし。街みたい。

これから向かうべき街の名はわかっている。新宿。そこに洩上はいるはずだ。

父からの最後の手紙にそうあった。それは彼が死ぬ二日前にロスから出されたものだ。

殺された。

彼女は家業が大嫌いだ。しかし、父の仇は討つ。必ず。

まっすぐ新宿へ行きたいところだが、その前に寄るところがある。

横田基地

シーン4 リチャード・ネルソン

「驚いたな。君のような少女が来るとは思ってもみなかったよ」

現れた少女に、米師団長リチャード・ネルソンは目を丸くして言った。

「君がイリア・サロニケ・アニナ？」信じられないといった表情。

「ええ。どういう意味です？」握手をし、平然と腰をおろしたアニナ。相手のオーバーな驚きように疑問符を投げかけた。

「ああ、いや……」ソファに深く座りなおしたりリチャードは口ごもった。

「もつと……そう。もつとお婆さんが来るものだと思っていた」エクスシストとしか聞いていなかった。そう言って笑った。アニナもつられて軽い笑みを浮かべた。

リチャードはテーブルの上にコインロッカーのキーを置いた。

「頼まれたモノを入れておいた。新宿駅のコインロッカーだ。地理は分かるかい？」

「ガイドブックがあるから」心配いりません。

おそらくそれを見せれば、親切なりチャードは部下に案内させただろう。が、知る由もない。

「このデスクの電話番号だ」メモを渡した。

「わかりました。色々ありがとうございます」

礼を言つて部屋を辞そうとする彼女に、リチャード・ネルソンは言った。

「また、会えるかな」

「たぶん」ふりかえり、笑みを返した。

新宿

シーン5 コインロッカー

JR新宿駅のコインロッカー。アニナは大きなバッグを引っ張り出した。

女性用トイレの個室に入つて中身を確認する。

オートマティックが二丁、サブマシンガン二丁、銃床のないピストル・グリップのポンプアクション式ショットガン一丁。扱い慣れたそれらの銃器。そして有り余る銃弾。携帯電話。

特に彼女が依頼して調達してもらったサブマシンガンは、イスラエル製のミニ・ウージー。全長三十六センチ。服の下に容易に隠せる。最新型のそれはMP5と同じクローズド・ボルト方式になっており、命中精度が向上している。

だばだばのジャケットの下に隠して身に付けた。腹に二丁のオートマティック、腰に二丁のミニ・ウージー。ショットガンはカバンに入れた。

シーン6〜7

シーン6 パブ『グレイトフルデッド』

かなり広いパブだが、満席でホールも混雑している。一癖も二癖もありそんな人間が、カウンターを占領している。紫煙が立ち込め、低音を強調したDJスタイルのレゲエが空気を揺らしている。日本人だけでなく外国人の姿も多い。訛りの強い英語が音楽に負けないボリウムで飛び交う。その人ごみの中をすると抜けていく綺麗な顔の少年がいる。すれ違いざま黒人の一人が声をかける。少年は背の高いほうだが、黒人のほうが頭ひとつ高い。

「祐二、今日はひとりか」

「後からみんな来るよ。ガンジャ欲しいの？」

相手がうなずくと「じゃあ、後で」と言っただけで立ち去る。黒人の知り合いが多いらしく、すれ違うたび「祐二」と声をかけられるが、「ハイ」と軽く手をふり歩いてゆく。呼び止めるほうは用がある様子だが、いちいちかまっていられないといった風だ。用件はわかっている。ガンジャだ。

彼の名は野原祐二。高校二年だが学校にはほとんど行っていない。気分は中退だ。ドラッグの中卸グループで外人客相手に通訳のようなことをしている。と言うと仕事のようだが、そうではない。

要は大麻愛好会（と呼べばかわいいが）のようなグループがあるわけだが、つてがあつてグラム三千円で手に入る。それを自分達も楽しむが時に五千円で売る。商品に混ぜ物がないから顧客が多い。で、外国人の客も多い。英語をしゃべれるのが祐二ひとりだから、自然通訳のようになる。祐二以外は皆二十代だ。ろくでもない人間達。まともに働いている人間はいない。

今日は大役を言い付かっている。皆の都合がつかないから、彼が品物の受け取りに行かなければならない。大金が懐にある。それも落ちつかないが、受け取りのことを考えるともっと落ちつかない。

相手は当然組関係者だ。俺の顔憶えててくれるといいんだけど。取引は一時間後。

祐二は店を出た。夜の新宿のネオンがキラキラと奇麗だ。勿論、一服キメている。

さて、一時間、どうやって暇つぶそう。ナンパでもしようかな。祐二の目に、金髪の少女が目にとまった。馬鹿でかいミリタリージャケットにボトムは砂漠色の迷彩パンツ、コンバットブーツ。少年のようにキャップをかぶりサングラスで目を隠している。旅行者かな？

シーン7 路上

相変わらず湿った風の臭いがする。それは日本の何処にいても感じる。

さて、これからどうする？ アニは自問自答する。戦う準備はできた。新宿に来た。しかし敵の居場所はわからない。当然だが、ガイドブックにもジャパニーズマフィアについては一言もない。そして新宿は彼女の想像よりかなりでかかった。

ここはまるでデイズニーランドみたいだ。そう思った。本物のデイズニーランドには行ったことがないが。

ガイドがいるといいんだけど。この街の裏事情に詳しい人間が誰か。

それにしても驚いていた。タクシー料金だ。ちょっと乗っただけで、彼女の国の羊飼いの月収分と同じだった。

「ハイ」声をかけられた。

「何してるの」

見れば、自分よりかなり年下の（そう見えた）男の子だ。子供がこんな時間に、いるのか。驚いた。貧困国にはストリート・チルドレンがいるものだが……。ここは日本だ。

「日本語話せる？」

「いや……」

「そう、じゃあ来たばかりなんだ。日本は何日目？」

「今日、来た」誰だ。この子供は。いやに馴れ馴れしいが。

「君、観光？ それとも仕事？」

そう聞かれて戸惑った。観光ではない。家業だから仕事になるだろう。

「仕事だ」と答えた。

「へえ」

それを聞いて少年は面食らった様子だった。アニナには知る由もなかったが、この街で仕事と言えば風俗だ。

「君、いくつなの？ 若く見えるけど」

「十三歳だ」何か問題あるのか。それよりこいつはナンなんだ。

少年はますます面食らった様子だった。

「まずいよ。年ごまかして働くつもりだろうけど、やばいんじゃない」

こいつ何の話をしている？

「別に年はごまかさない」

いよいよ少年は仰天した。えっ！？ そんな店があるのか！？

いや、まさか。東南アジアならともかく、日本国内にそんな店があるはずがない。

「君、何処の国の人？」

「シルバニア公国」

「ああ、シルバニア！？」って何処だ？ アレはウサギの国じゃなかったのか。

「お前は誰だ？ わたしに何の用がある？」用がないなら立ち去れ。とばかりにアニナは言った。

「俺は祐二。ユウでいいよ。十六歳だ。この後、ちょっと用事があるんだけど、それが済んだら暇だから、良かったら街を案内するよ」

十六歳！？ とてもそうは見えなかった。自分より三つも年上とは。驚いた。が、それを口に出すのは相手に失礼だろう。何しろ武士の国だから。こいつはまず武士ではないが。それよりも……。ガ

イドができた。とりあえず街の案内くらいは期待できる。

「わたしは、イリア・サロニケ・アニナ」

交渉成立だ。

「チップは」ガイド料のことを聞いた。

「いいよ。そんなの。いるわけないジャン」その返答に、やっぱりここは武士の国だと感心した。

「だけど、ちよつと野暮用があるんだ……」歩きながら少年はしゃべった。

「わたしもこの街に用がある」

「へえ。どんな？」

「浏上という男を捜している」

「浏上？ 誰？ それ」それだけじゃあ。ねえ。

「黒龍会というジャパニーズマフィアにいるはずだ」

「はああ!？」

祐二は仰天した。し、混乱もした。思わず足が止まった。こいつはやばい女じゃないのか。かかわらない方が身のためかも知れない。しかし、スルーするには可愛すぎる。せつかくここまで話もしたのに。

で、正直なところを切り出した。

「実は、黒龍会だったら今から会うんだ。まあ、本家じゃなくて分家の方の下っ端の人だけど……」

「へえ……」ラッキー。わたしは知っている。

「連れて行け」彼女としては銃口をつきつけたい気分だ。

「うーん。まあ。いいとは思うけど」こんな可愛い子連れて取引に行けば、余裕に見られるかもナ。呑気な彼は思った。

シーン8〜9

シーン8 地下駐車場

人気のない地下駐車場に、黒い大型セダンがゆっくりと入ってきて、待っていた祐二とアニナの目の前で停まった。黒いフィルムを貼ったウインドウがゆっくりと下がる。

「お前か。見たことある。確か祐二とかいったな」

上半身、下着姿の極道が言った。太い腕の下着の端から刺青がはみ出している。

「電話で聞いたよ。今日はお前が代理だって？」

「はい。先輩達はみんな来れなかったンで。金は持ってきてます」

「その女はなんだ。お前の女か」アニナをじろつと睨んだ。

「ええ。まあ」そういうことにしておいたほうが良いだろう。

「いい女連れてるじゃねえか。今度、俺にも紹介しろ」

「はい、まあ」

「乗れ」

そう言われて、祐二はアニナを促して後部座席に乗り込んだ。

今日はグラム三千円で二百グラムの取引。相手が金を数える間、待たなければいけない。なんとも落ちつかない。金を数え終わると、男は品物をダッシュボードから取り出して、投げて渡した。アニナが訝しげにそれを見た。

「ところで、ちょっとお聞きしたいンですけど。洲上さんっていらっしやいます？」

本家のほうの方かも知れないンですけど」

気を利かせて祐二は聞いた。が、すごまれた。

「おい、余計な事聞くじゃねえか。それを聞いてどうする気だ。あ」

「いえ、そんなつもりは……」

これ以上は聞けない。それに取引は終わりだ。祐二はあいまいにごまかし、アニナを促して車から降りた。

「ありがとございました。またお願いします」車のなかの相手に頭をさげた。

「そりゃあ、こっちのセリフだ。要るときはいつでも連絡しろ」
そう言つて車は去つていった。駐車場に静寂が戻る。

「淵上さんつて人のこと聞いたけど駄目だったよ」祐二はさっきのやり取りを説明した。それを聞いてア二ナは悔しがった。日本語がわかれば銃を突きつけてやったのに。

「ところで、今お前は何をしたんだ」ア二ナは取引のことを聞いた。
「え、ガンジャを買つたんだよ。ガンジャわかる」

「麻のことか」

「ああ、そうそう。よく知ってるジャン」

「何故そんなものに金を払う」しかも、こんなまるでドラッグの取引みたいな真似をして。彼女には不思議でしようがない。

「だって法律で禁止されているドラッグだからだよ」

「イリーガル?? ドラッグというのは幻覚性のある植物を精製したモノだろう。それは麻を乾燥させただけじゃないか」

「それでも、日本じゃ法律で禁止されてるんだよ」祐二は大事そうに包みを上着の内側に入れた。ア二ナは納得がいかない表情。

「おかしな国だ」なにしろ、彼女の城の周りにはいくらかでも野生の麻が群生している。不思議に思つても当然だ。

あつ、と祐二が鋭い声をあげた。続けて、なんだ、吃驚させやがつてと安堵の言葉を吐いた。

「どうした」ア二ナが聞くと、

「いや、誰もいないと思つていたら、あそこ」祐二が指差すほうを見れば、駐車場の壁にもたれて浮浪者がひとり座り込んでいる。彼らには興味なさげに。

「ホームレスだよ。ビックリしたぜ」

その姿を見て、ア二ナの瞳が鋭くつりあがった。片手で祐二を押し止めた。

「ホームレスじゃないわ」

え、じゃじゃあ、ひよつとして刑事か。一瞬にして青くなる祐二。
「あなたの国の警察はそんなに優秀？」空港に近衛兵もいないのよ。
アレで治安が守れるかしら。

「じゃあ、なんなんだよ」まさかホームレスが俺のガンジャを狙ってんのか。

「違うわ。たぶん、わたしに気づいて後を追ってきた……」

はあ？ 何のことか意味がわかんねえよ。しかし、ア二ナがミリタリージャケットの前をはだけ二丁のオートマティックをかまえるのを見て、

「げ、こ、殺すのか」腰を抜かしそうになった。何故、そんなものを持つている。

「殺す？ もう、死んでるわ」

浮浪者が立ち上がった。

「どうやって俺を倒す」自信に満ちた声で浮浪者は言った。その目は獣の目。

げえ、こいつ英語しゃべりやがった。浮浪者だから学がないとは限らない。いや、そんなことより彼はパニックだった。死んでると言われたけど、でも死んでないし。

「試しに一発撃ってみましょうか」不敵な笑み。

ア二ナが言い終わると同時に、浮浪者はもの凄いスピードで突進してきた。人間の動きではない。

銃声が一発轟いた。ア二ナが撃つたのだ。

浮浪者は弾を避けた。人間業とは思えぬ俊敏さで。

ぎゃあ、人間じゃねえ。殺される、祐二は本能で感じた。

次の瞬間、二発の銃声が続けざまに轟いた。祐二は顔を伏せた目の端でそれを見た。一発目の弾を浮浪者が避け、その避けたところに二発目の弾が当たる瞬間を。

目前に迫っていた浮浪者は、その瞬間灰の塊となり、突進してきた勢いもそのまま祐二の上にどしゃっと覆いかぶさった。

「うぎゃあああああ」なんなんだ、こいつは。なんなんだ。こいつ

は。

「なんなんだ、こいつは」喉を嚔らしてやっとの思いで声を絞り出し聞いた。

「バンパイアよ」こともなげな答えが返ってきた。

「そんな、馬鹿な」灰を必死で払いのけながら祐二。

「今、見たでしょう」

「ど、ど、どうやって倒したんだ？」

「わたしは集中すると、一瞬後の未来が見えるの。つまり、コンマ五秒後の敵の動きが見える。だから一発目を撃つと同時に、敵が避ける先を狙って二発目を撃つたの。今はクラスの低いバンパイアだから灰になった」

いかれた女かとは思っていたが、こいつはマジでやべえ。

「お前、何しに日本に来たんだ」

「言っただでしょう。仕事」

「コレがか！？ コレがお前の仕事なのか！？ 絶対かわりたくない！！」

バンパイアだと！！ こいつは気が狂ってる！！

「いいか。お前に会ったこと、ガイドすると言ったこと、アレは取り消した。俺はお前なんか知らないし、会ってもいない。いいな」
フラフラしながら指を突きつけ言っただが、小首傾げて相手は答えた。

「それはいいけど、ここから生きて出られるかしら」

「どういう意味だ。いや、いい。俺はもう知らない。こんな女かわるンじゃなかった。とつとグレイトフルデッドでみんなと合流しよう。今夜はガンジャパーティだ。今のこと全部忘れよう。」

出口へ向かいかけた足が止まった。

人影が六つ。駐車場へ入ってきた。浮浪者たち。

涙目でア二ナをふりかえった。

「情けないな。お前、日本人だろう」武士の国の。

なんと言われてもいい。祐二はア二ナの背後に駆け込んだ。背中

越しに様子を伺う。

六体。まずいな。アニナは感じた。一体でも高位のバンパイアが混ざっていれば厄介だ。

祐二の手前余裕でかまえてみたものの、アニナは冷静さを失いつつあった。頭に血が上り、頬が紅潮する。瞳がつりあがった。まあいい。かかってきやがれ。こんな東洋の何処とも知れぬ場所で。

六体動いた。同時だ。

処女のまま死んでたまるかつ！！ 母国語で吐きすてた。

前に突き出した腕を交差させ、かまえた二丁の拳銃を立て続けに撃った。

宙に跳んだバンパイアが灰に変わる。一体。二体。

姿勢を崩さず二丁の拳銃で撃つ。三体。灰が地に落ちた。もう、距離が近い。拳の届く距離。銃を持ったままの拳を顔面に叩き込む。同時に足を高くふりあげ、かけ蹴り。倒れた敵の頭に銃弾をぶち込んだ。足元を灰が舞った。

残るは二体。

アニナと距離を取り、余裕で待ちかまえている。撃ってみろ、と言わんばかり。

撃ってやる。お望みどおり。

バンパイアは一発目の銃弾を避けた。その顔面に二発目が命中した。銃弾は男の後頭部を大きく吹き飛ばして貫通したが、その動きは止まらない。

まずい。高位のバンパイアだ。すばやくオートマティックを捨て、ミニ・ウージーを握る。

躍りかかってきた敵にまわし蹴りを放った。避けられた。すばやく体を回転させ後ろまわし蹴り。敵の後頭部をかかとでぶち抜いた。倒れたその頭をミンチにしようと銃口突きつけたとき、もう一体が襲い掛かってきた。

体をぶつけるようにして引き金を引く。腹に風穴を開けてやる。もつれ合って倒れた。その間、引き金は引きつ放し。銃弾は男の腹

をえぐりつ放し。だが、その腕はすごい力で彼女を放り投げた。コンクリの上に叩きつけられ転がった。

はらわたを垂れ流しながら男が立ち上がってきた。ゆっくりと彼女に近づく。

地を蹴って飛び起きると、跳躍して三六〇度回転しての蹴り。

男の体は吹っ飛び、立ち上がっていたもう一体の男にぶつかり、二人とも倒れた。

チャンスだ。アニナは仁王立ちして、倒れた二体のバンパイアの頭に銃弾を叩き込んだ。男達の顔面に見る見る穴が空いていく。頭がミンチになった。弾倉が空になった。それでも四本の腕が空をかいている。普通、死体は動かないが、動いている死体は頭を潰したって動くものだ。

アニナは大きく息をつくとき、ミニ・ウージーを収めた。それから地面に転がっているオートマティックを拾い上げ、腰を抜かしている祐二に言った。

「倒した。急いでここを出よう。銃声を聞きつけて警察が来るかもしれない」

そ、そ、そ、そりゃあ、そうだ。コレだけ派手にぶっ放したら、既に通報されているはずだ。だ、だ、だ、だけど、だけど。

アニナは動転して口をパクパクさせている祐二の腕を引っ張りあげて立たせた。

「歩けるか」

祐二は無言で首をふり、再び尻餅をついた。

シーン9 逃亡

まだ足ががくがく震えている。何とか歩けるが……。

祐二はすたすたと前を歩くアニナを恨めしげに見た。なんだってこんな奴とかかわったんだ。今日は厄日だ。新宿でナンパした女の子がバンパイアとドンパチやるのが趣味だなんて確立はどれほどのものか……。あり得ない。

「ユウ。まだ、震えているのか」ふりかえりアニナが言った。
当たり前えだ。口には出さず毒づいた。

「そのコーヒーシヨップに入るう。コーヒーでも飲むといい」
賛成だが、俺より年下の癖に威張った口をきいて……。

素直に従いコーヒーシヨップに入る祐二。

ホットコーヒーを頼み、運ばれてくるまでに、祐二は回らぬ舌で
懸命に聞いた。

「さっきの奴らはなんなんだ」

「バンパイアだ」

訝しげにアニナ。その質問には答えたはずだが。

「映画に出てくるそれとは違い、本来の意味でのバンパイアだ。それは不当な手段で蘇った死者たちのことだ。クラスの高いほど強敵だ」これだけ説明すればわかるだろう。

「吸血鬼じゃないのか」普通バンパイアと言えば。

「別に血は吸わない。蚊じゃない」おしほりで、ミリタリージャケットについた返り血をふき取りながらアニナ。おしほりが黒く染まる。奴らの血は黒い。

「あんな奴がいっぱいいるのか」

「数はそんなにいない。人間社会にまぎれている」

「あんなことがしょっちゅうあるのか」

「そうだな……。家業だから」

勘弁してくれ。ゲームセンターに行つてゾンビ撃つて満足してる。本物相手にしてるンじゃねえ。十三歳の小娘が。

まあ、いい。こいつとはここでお別れだ。お仕事ご苦労様。これからグレイトフルデッドに行つてみんなと合流して……。

ガンジャは！？ 俺のガンジャは何処だ！？

祐二はジャケットを裏返して全てのポケットをひっくり返した。
がない！！

俺のガンジャはっ！？ 何処にもないっ！？

「どうした。何をやっている？」アニナが聞いた。

「ガンジャがないンだよ。さつき買ったガンジャが」

「そうか」さつきの騒動で落としてきたのだろつ。「それは気の毒だ」

「気の毒で済まないンだよ。殺されるよ、俺。新宿には居られなくなる」

仲間の大麻を全て無くしたとあつては。やばい奴だっていっぱいいるンだ。

「正直に話してみればどうだ」

「話せるかよっ！！」誰が信じるンだ。うまい嘘をついたほうがもつとマシだ。しかしどんな嘘をついたつて、良くて軟禁、悪くて監禁……リンチ確実……運が悪けりや……。

逃げるしかねえじゃねえかよぉ！！

「来い。早くここを出よう。こんな明るい店に居て見つかったら最後だ」

こうなつたのも半分以上、いや、全てこいつの責任だ。

「一緒に逃げて、もし捕まったらお前の口から俺の無実を証明してもらつ」

「それはかまわないけれど。……なんだつたら今から一緒に行つて話してやるつか？」

いくら第三者の口から聞いたつて信憑性ゼロなんだよ！！　だから逃げるンだ。釈明は最悪の場合の手段だ。

祐二はおつとりとかまえたアニナをせきたてて店を出た。

シーン10～12

シーン10 地下駐車場

「警部。他に灰にまみれた浮浪者の服が五人分見つかりました」

「ふーん」

とりあえず、動いていたから、二人の男は救急車で搬送した。が、どう見たってありゃあ、死んでいる。死体袋のほうがお似合いだ。検死官を気絶させないために救急車に放り込んだんだ。医者が気絶したって知るもんか。検死官は身内だ。

それから、この大麻。ざっと二百グラムくらいか。頭が混乱する。いつたい、何があつたんだろうな」

若い刑事は肩をすくめた。

「他に遺留品は？」

「後は……薬莢くらいスね」

壮年の警部檜崎はため息をついた。

「この事件は、状況を全部書類にまとめたらエクスファイル送りだ」

「え、あるんですか？」そんなものが本当に。

「冗談だ」だが、その類の事件だ。

シーン11 ホテル

「なに？ お前こんなところに泊まってるのか」

「リザーブしてある。今からチェックインする」

超高層ホテルのロビーである。

「お前って金持ち？」

「イリアは爵位だ」

こともなげに言うと、フロントで手続きを済ませ、ボーイに案内させる。

祐二はふかふかのカーペットに驚いていた。

エレベーターの到着先は最上階近い。ロイヤルスイートではないが、充分上等な部屋へ案内された。広いリビングの奥にベッドルーム。北欧製と思われるソファと重厚なカーテン。

「うひょー」祐二はさらにふかふかのカーペットに驚き、ジャンプしてその感触を確かめた。本当なら今夜は高架下でコンクリの上に寝なきやいけない身の上だ。

ア二ナはぐるりと部屋を見て回った。二部屋あるし、調度品や家具も彼女好みだ。

しかし、やはりここも同じだ。息苦しい。今まで、日本のどんな場所へ行っても、窓は密閉されていた。窓を開けることができないからどことなく息苦しさを感じる。日本人は慣れているのだろうか。この部屋にも壁一面を覆うカーテンがかかっている。その奥には密閉された窓があるに違いない。

祐二が分厚いそのカーテンの横にある紐に気づいた。彼女は今日着いたばかりだと言った。だったらこれはまだ見ていない筈だ。ルーマニアがどんな田舎か知らないが、こんな光景はじめての筈だ。いたずらっぽい笑みを浮かべると

「ア二ナ」と声をかけ、紐を思い切り引っ張った。

「東京へ、ようこそ」カーテンが開け放たれ夜景が窓外に広がった。巨大なビル群。広がる光の洪水。

ア二ナは目を睜った。こんな美しい光景は見たことがない。光の平原が何処までも、何処までも、地平までも続いている。

「星が、降りてきたようだ……」

祖国の星空を思う。古城の夜を、森を思う。まったく対照的な眼前の風景。これらがシステムであることが信じられなかった。全ての光の下に人間が居て、それぞれの人生を送っていることが。だから、美しいだけではない。闇でもある。この風景のどこかに淵上もいるのだ。

何処に居ようと必ず倒してやる。

指でピストルをつくり、狙い定め、バンと呟いた。

「ユウ。黒龍会に洩上がいるかどうか……調べられるか」

浮かれ気分だった祐二が真顔に戻る。

「そりゃあ……。どうか」知り合いの組関係者が何人かいる。そういう情報に聡い不良仲間もいる。わかるかも知れないし、わからないかもしれない。ただ、その男についてもっと詳しく知っておく必要がある。

「洩上って奴のこと、知ってること全部教えてくれ」それ次第だ。

アニナはソファに深く身を沈めた。

「生前、洩上は黒龍会に所属していた。もし、日本に潜伏するならば、必ずその庇護下にある筈」

生前！？ 生前てのは穏やかな単語じゃない。

「その、洩上つてもバンパイア……？」もしかして。

「そうだ。それに強い。多分、かなり高位だと思う。父が殺された。父は日本へ向かう奴を追っていて、ロスで殺された。……このジャケットは父が着ていたものだ。それから」ポケットからジップを取り出して、

「このライターも父の形見だ」そう言っただき過ぎる男物のミリタリージャケットを脱いだ。皮製のそのジャケットはよく見ると銃弾の跡と思われる穴がいくつか空いている。そして至る所に残る黒い血の染み。

「お前の父さん、でかつたんだなあ……」確かに、そのジャケットは大きい。アニナが着ればコートのような。袖をまくって着ている。そうしないと指先が出ない。

「洩上の年は三十幾つか。だが、今は多分二十そこそこに見えるだろう。エルゼルという組織知ってる？」

「いや」

「当然。けれどフリーメイソンは聞いたことがあると思う」

「あるけど」

「フリーメイソン、イルミナティ。政治的にも経済的にも世界を牛耳っている秘密結社。その目的は地上を悪魔のモノとすること。馬

鹿げていると思うかもしれないけれど、彼らは本気よ。そしてエルゼルはそのなかでも最も尖鋭的なグループ。恐ろしい悪魔召還の儀式を何度も繰り返している。もっとも、成功したことはないみたいだけれど。彼らにできるのは死者を蘇らせる術くらい。そう。淵上も彼らの手でバンパイアとなった」

「と、すると、どういうことになる？」

「黒龍会は大きな組織だけれど、例に漏れず日本最大の非合法組織長州会の傘下に入っている。そして長州会はフリーメイソンの息がかかっている。黒龍会とエルゼルに何らかのつながりがあると考えるのが普通」

「そうか……。じゃあ、やっぱり淵上という男は黒龍会にいるんだろ？」けれど、と言って祐二は続けた。

「黒龍会と言っても事務所はいくつもあるし、傘下の暴力団まで含めたら何処にいるのか、さっぱりだな」

「それを調べるにはどうしたらいい？」

祐二はにやりと笑って言った。

「任しとけよ。そういう仕事なら俺の分野だ」裏の情報網なら。

とりあえず、明日の夜。明日の夜まで待たなければならない。情報を持った人間が出歩くのは夜だ。

祐二は大きく伸びを言った。

「今日はもう寝よう」そして部屋を見回した。奥に寝室があるがベツドはひとつだけのようだ。

「俺はソファで寝るからいいよ」

「それは助かる」ア二ナがほっとした口調で言った。

なんだ。少しは意識してたんだな、と思った。男勝りの小娘だと思っていたけれど。可愛いところもあるじゃん。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

ア二ナは寝室に入った。間接照明の灯りを調整した。体を締め付けていたホルスターを外す。倒れこむようにしてベッドに横になっ

た。父のジャケットを肩からかぶった。このジャケットを着ていると父に守られているような気がする。

「パパ……」小さく呟く。故郷の山々を、子供のころの思い出を脳裏に描こうとする。が、二分と経たないうちに寝息を立て始めた。充分すぎるほど疲れている。異国に来て、ガイドブックを頼りに街をさまよい、バンパイアも倒した。それも七体も。表には出さないが緊張の連続だったのだ。疲れて当然だ。

一方、リビングの祐二はなかなか寝付けなかった。確かにさっきまでは動転していたが、こうして落ちついていても、この先どうなるのかさっぱり分からない。とりあえずハッキリしていることは、測上って奴を捜せばいいってことだ。

調子の良い彼は、都合の良い所だけピックアップして考えることにした。もし、ガンジャを落としていなくて、寝室で寝ている女の子もバンパイアなんかとは無縁だったら、今夜はスペシャルラッキーな夜だ。見るよ、この夜景。ドンペリでも頼みたい気分だ。飲んだことはないが。それにしても本当に、可愛い子なんだけど。バンパイアなんかと無縁だったらね……。

シーン12 朝

早朝、目が覚めた。時差の影響だろうか。頭がぼんやりしている。きのう、光の洪水だった窓外はどこまでも続く灰色のビル群と化していた。夢から覚めたような気分だ。祐二はまだ寝ている。アニナは、この間にシャワーを浴びた。真新しいタンクトップを着て迷彩パンツをはく。ベッドに腰かけ裸足のまま銃の手入れをした。

昼近くなって、祐二は目を覚ました。むくりと起き上がると、不思議そうにあたりを見回した。目が合うと、日本語で何かポツリと言って、照れたような顔を見せた。

「何て言ったんだ？」

「日本語でおはようって言ったんだよ」

「ふーん」

アニナは受話器を上げると、ルームサービスでサンドウィッチを二人分と新聞を頼んだ。

運ばれてきた新聞をアニナは祐二に渡した。

「ユウ。読んで」日本語のニュースペーパーだ。

祐二が広げた新聞を、アニナが横から食い入るように見た。

記事は小さかった。

「あつたよ。これだ」祐二は要点を読んで聞かせた。

見出しは『地下駐車場に浮浪者の変死体』。内容は、銃声がしたと住民から通報があり、警察は**町の地下駐車場でホームレスらしき男二人の遺体を発見した。と、簡単。それ以上の情報はない。銃声はかなり激しかったことを語る住民もいたが、突っ込んだ記事はなかった。

「警察も伏せてるね」祐二は言った。考えてみても動いている死体なんて、発表できない。どう処分したんだろ？

「いつもはどうなの？」アニナに聞いた。警察沙汰になっても公にはならないのか？

「シルバニアなら問題ないわ。わたしは外国で仕事するのは初めてだから……わからない」これまでパパがやっていた。

どっちにしろ、警察ではこれ以上解決できない問題だ。それでも捜査はしているだろう。目撃者くらいいるかも知れない。祐二は立ち上がった。

「じゃあ、俺は出かけてくる。夜中まで戻らないと思う。お前は今日一日休んでろ。俺独りで行く。お前を連れてうるちよろすると目立つから」

「どういう意味」いきり立つアニナ。柳眉を逆立てる。

「あんな」祐二はいさめるような口調で、けれど少し照れてこう言った。

「お前は目立ちすぎるんだ。人目をひくんだよ。男っぽい格好していても……その、チャージングってことだよ」

アニナは唇尖らせて黙りこんだ。頬が少し染まる。

「じゃあ、行ってくる。朗報を期待しててくれ」
祐二は笑顔でそう言つと部屋を出た。

シーン13～14

シーン13 繁華街

夕刻、祐二は東京有数の繁華街に姿を現した。

さてと、まずは幸雄ちゃんだな。幼馴染の携帯に電話を入れた。

黒龍会ではないが、非法法組織の構成員になっている。一番下っ端のペーパーじゃ有力情報は期待できないが。

「おう、祐二？ どうした」電話に出た相手は、どことなく態度がでかい。思わず苦い笑みが出るが、聞きたいことが聞けるのならかまわない。

「なあ。幸雄ちゃん、黒龍会に洩上って人がいるかどうか分かる？」

「洩上い？ さあ、わかんないな。そいつがどうしたんだ？」

「いやあ、ちよつと搜しててさ」

「知らないなあ……。黒龍会最近どうなってんの？」逆に聞かれた。「えっ？」

「最近、あそこ変なんだよ。変な外人が出入りしているみたいだし」

エルゼルだ。直感した。

「そうなんだ」

「分かったら電話してやるよ。誰だっけ？」

「洩上」「洩上ね。はいはい」そう言つて通話終了。一発目から未確認有力情報ゲットだ。幸先良い。

次は知り合いの組関係者だ。さすがに携帯は知らない。事務所に電話した。

「ちわス。ご苦労様です。祐二と言いますが、健さんお願いできますか」姓で呼ぶのが礼儀だろうが、通り名しか知らないのだから仕方ない。

しばらく待たされて相手は出た。

「おう、運が良かったな。今出るトコだったんだ。どうした。なんか用か」

「ええ、ちょっと人を捜してまして。健さんだったらご存知じゃないかと思っただんで……。黒龍会の洩上って人なんですけど」

「そいつがどうした？」

「いや、捜してるんですけど」

「こら、素人が変なトコに首突っ込むんじゃないぞ」一喝された。

「スイマセン」やっぱ、そう言われると思った。

「もう切るぞ」ガチャン、切られた。

他の知り合いもおおむね同じ。組関係者から情報を得るのは無理なようだ。俄然、道は険しくなった。

祐二は繁華街の溜まり場に向かった。そこは家出少年少女が夜毎集う場所。昔つるんでいた仲間の溜まり場である。

「あれ？ 祐二ジャン。久しぶりだなあ」

ゲームセンター前。派手な車が並んで、一方通行の通りは渋滞している。

「最近ずっとこもってたからね。相変わらず、ここに居るんだね」
集まっていた連中と話す。

みんな、約束があつてここに来るわけではない。用があつてここに来るわけではない。ただ、ここに来て仲間が来るのを待って、何か起こるのを待っている。

ガンジャの話を既に知っている者がいた。

「お前、ガンジャばくつたんだって？ やばいじゃん」

「なんだよ、その話、もう知ってるの？」

「お前、ジャンキーグループから指名手配されてっぞ」

「やべえ。なあ。ほら。新聞見た？ 浮浪者の殺人事件。あそこで取引したんだよ。その後事件に巻き込まれちゃってさ。必死で逃げ、気がついたら落としてたんだ」ここで、一生懸命言い訳して、伝わるのを待とう。甘いかも知れないが。

「お前、あの事件見たの？」

「やっぱ撃たれたの？ あれ」「ねえ、ねえ。何の事件？」

俄然人が集まる。祐二は適当にごまかした。

「撃たれたよ。でも、俺もあせってたから、何があつたかよくわからない。撃った人間も見えてないんだ」

へえ。そうなんだ。と言いつつも、殺人事件の目撃者として、しばらくもてはやされる。これではイケナイ。聞かねば。

「ねえ。最近、黒龍会で何か変わった話ない？」

「黒龍会……？ さあ……」

「最近、ほら、あの気持ち悪い外人集団。あれ、黒龍会じゃない？」

「多分、それだよ。見たの？」

「時々、見かけるけど……」

「なんか、不気味なのよね。いつも一緒にいる日本人の人も」

日本人。瀏上かもしれない。

「あいつらさあ。ほら。新宿の**通りにある雑居ビル。あそこの地下につぶれたテナントがあるんだけど、よくそこに入っていくんだよ。何やってんだろう」

「そう、そう。わたしも見たことある」

やった。やあっぱり、こいつら情報の宝庫だ。

祐二はそれからそこで粘った。時間帯が違えば、集まる人間も違う。誰に聞いても、今のような話が聞けた。しかし、瀏上について聞いても、知っている人間はいなかった。

携帯に着信。知らない携帯番号から。出てみると相手は健さんだった。

「おう、祐二。あんまりくだらん事で、事務所に電話かけてくるなや」

「すみませんでした……」

「黒龍会の瀏上なあ。黒竜の親父さんトコに客分であつた奴が、確か瀏上や言いよつたなあ」

「あ、ありがとうございます」

「ああ。ほんで、今は事務所任されて、何やけつたいな外人とつるんどるわ。まあ、俺の知つとるんは、それぐらいや」

「ありがとうございます。助かりました」

「おう。いいか。じゃ、切るぞ」

さすがは極道だ。確かに考えてみれば、事務所に電話しても、俺みたいな若造相手に電話口でペチャクチャ聞かれるままに教えるはずがない。たとえ話したって差し支えない内容でも。そんな口の軽い極道はいない。だけど、後から、こうして教えてくれた。優しいトコあるンだよな。

さて、アニナ。パパの仇を討たせてやる。洲上の奴をぶつ殺そうぜ。黒龍会の事務所なら、俺も三つくらい知っている。そのどれかだ。そこに居なけりゃ、組長の自宅だ。まずは雑居ビルの地下で、洲上とエルゼルの奴らが何をやってるか探りを入れてからでもいい。ホテルに戻ったとき、午前三時を過ぎていた。もう、寝てるに違いないから、こりゃあ、ロククドアウトだな、と思ってロビーに入ると、ソファに座っていた。彼の姿を見て立ち上がる。寝ずに待っていたらしく目が少し赤い。

「心配した」そう言った。

ごめん。思わずそう答えた。連れ立ってエレベーターへ向かう。でも、いい知らせだ。ほぼ、分かったぜ。

シーン14 ホテル

翌朝、二人とも午前七時には目を覚ました。祐二がホテルの前のバーガー・ショップでモーニング・セットを買ってきた。で、それを食べながら情報を整理しようという話になったのだが、アニナが露骨に眉をひそめた。

「なに？ この臭い」ハンバーガーの包みを開いて。

「え、なんか臭うか？」食べなれている祐二は感じない。

アニナは、一口食べて下に置いた。

「とても食べれない。なんなの。このお店」

「え、なんなのって、お前の国、ミツクないの？」

「ない」

日本人は、こんな物を食べているのか？ セットのソーセージに

も手を出してみたが、もつとまずかった。どうしたらこんなにまづくなるんだろう。ただのソーセージが。

結局、アニナが食べたのはポテトだけだった。

「残すんなら、俺がもらうな」祐二がアニナの分まで残らずにいられた。

驚嘆の目で見えるアニナ。よく、こんな物を平気で……。いや、世界には昆虫類を食べる人々もいる。ただの食文化の違いなんだ。

「とりあえず、分かったことは、洩上は帰国当初黒龍会の組長の自宅に客分として身を寄せていた」

「キャクブンって」

「まあ、大事なお客様ってトコかな」

「で、その後事務所をひとつ借り受け、おそらくエルゼルと思われる外国人達となにやら画策している。奴らが出入りしているという雑居ビルの地下テナントを調べてみれば、はつきり分かるかもしれない」

「そうね。じゃあ、そこから調べてみる？」

返事がないので、祐二の顔を見た。目を見れば合意したことが分かった。

「侵入は今日の夜だ。まずは俺一人で下見に行つて来る」

「今から？」

「勿論」

祐二は立ち上がった。パン屑を払う。

「見て来るだけだから、心配ない」

侵入は今日の夜。人がいなければ即。人がいれば、いなくなるのを待つて中に入る。鍵の種類を見ておきたい。シリンドー錠ならなんとかなる。黒龍会の事務所を張り込んで、どの事務所にエルゼルと洩上がいるか特定したい。ひとりのほうが都合がいい。

祐二はアニナに見送られ部屋を出た。

ひとり、部屋に取り残されたアニナは落ち着かなかった。昨日といい今日といい、祐二に任せっきりだ。彼を信用していないわけで

はない。信用している。信賴していると言ってもいい。彼女が日本語を話せない以上、探偵は彼に頼るしかない。

誤算だった。日本人がここまで英語を話せないとは知らなかった。ガイドブックには、大抵の日本人は大学卒業までに八年間英語を勉強する、と書いてある。それを読めば、まさか英語が話せないとは思わない。

しかし彼女も、日本語をまったく勉強してこなかったわけではない。せめて駅で迷子にならないよう、日本語の読み方を憶えてきた。地名さえ読めれば地図や案内図を頼りに行けるからだ。しかし、やられた。地名の表記は全て中国語だった。何故だ！！と唇を噛んだ。彼女に読める五十五音はまったくなかった。

まったくチンプンカンプンな国だ。

窓の外の大都市に目を向ける。

灰色だ。何もかも、目に映る世界が地平まで灰色だ。陽射しを浴びても。これが日本の色だ、と思った。白でも黒でもない、灰色。

やがて、灰色の世界が朱に染まり始める。沈みかけた太陽の照り返しを受けて高層ビル群の窓硝子が輝く。幾本もの塔が、こちらに向かつて輝いているようだ。やがて見事な夕景は幕を閉じ、青みがかった世界がしばらく続く。海の底のような静寂が喧騒の奥に聴こえる。だが、やがて闇が全てを包み込みはじめ、街は灯りを点ける。一転して鮮やかな世界が浮き上がる。夜の底に。星の大平原が続く。アニナはずっと飽きもせず、その光景を見続けた。ノックの音。祐二だった。

「大収穫、って言えるのかな。新宿に奴らの事務所はある。それから雑居ビルの空テナントはシリンダー錠だけだから、ピッキングで入れる」

アニナは軽い笑みを浮かべた。ありがとう、ユウ。

「行きましょう。用意はできてるわ」

シーン15～16

シーン15 張り込み

老朽化した雑居ビル。場末のそのビルはテナントの半数が空っぽだ。残っているテナントは、細々と営業を続ける小さなスナックやバーなど。人通りも少なく、悪魔崇拝者が策動するには丁度良い塩梅の場所。

地下にテナントはひとつ。もとは大きなラウンジかパブだったようだ。歩きながら祐二はアニナに説明する。奴らは六時きっかりに中へ入って行った。多分、まだいる筈。そこに路上駐車してある黒いセダンがそうだ。日本人が一人いた。多分、洩上。

「どうする？」ビルの手前で足を止めアニナは聞いた。どこで張り込めばいい。

「そうだな」祐二はしばらく考えた。丁度良い喫茶店もない。

「堂々としていよう」祐二はとなりのビルのエントランスに座り込んだ。手の缶ジュースを飲み干し、空いた缶を口にくわえた。

「このスタイルは、誰がどう見ても家出少年のシンナー中毒者だ」アニナに説明し、真似をするよう言った。

「こうやるのか？」空き缶のへりを歯で噛みくわえた。

「そうそう」指南しながら思わず笑いが出る。

「イリアて爵位だったよね」

「そうだ」

「てことは貴族なんだ」

「そうだ」アニナも愉快そうだ。こんな遠い異国の地で、シンナーを吸う真似するなんて。そもそも、シンナーを吸う人間を見たことがない。

祐二も金髪のこんな可愛い外国人少女のシンナー中毒者は見たことがない。しかもこの子は、本国ではお城に住んでいる、まあ言い様によっては深窓の令嬢だ。

「こんな真似させてごめん」そう言うしかない。

「いや、それはこっちのセリフだ。つき合わせて悪いと思う」真面目な顔を作り答えるアニナ。そう言えば、と続けて、

「ユウはジャンキーだったな。ドラッグが切れて大丈夫なのか？」と聞いた。

祐二は軽く笑みを浮かべ答えた。

「ガンジャしかやってなかったから。禁断症状とか出ないよ。だけど、ガンジャに常習性がないってのは嘘だな。もの凄く吸いたい。煙草ほどの害もないってのも嘘だ。タールの量は半端じゃない。それにアル中のように厄介じゃないってのも嘘だ。自我崩壊してディープな世界に行っちゃった人を知っている。廃人同然だね」

ふーん、そうなんだ。とアニナは答えた。どんな凄い能力を持っているても、十三歳の少女であることには変わらない。知らない世界には興味深げだ。

「廃人になるとどんな風なの」

「生きている人間の入れ物だね。多分、なかではもの凄いことになっているンだろうけど、外から見る限りじゃ、生きてない。としか思えない」

「生きてない？ そうなの？」

「そう。コミュニケーション不可能だから。一言もしゃべらないし」祐二はそんな人間を数人見た。勿論、その人間は大麻だけでなくLSDやヘロインもやっていたのかも知れない。そこははっきり分らない。けれど大麻が、世間一般が思っているほど無害であるとは思っていない。高校生や中学生のやっていいものではない。自分を棚に上げているが、その辺の危険認識はしている。

時刻は十二時をまわり、そろそろ一時になるつかという頃。

隣のビルの地下から、人影が現れた。二人の外国人と、一人の日本人。

二人の間に緊張が走る。アニナはそつちを見ないようにして、目の端でその日本人を見た。長身で黒いスーツを着ていて、長く後ろ

で結んだ髪にサングラス。それくらいしか見て取れなかった。まあ、いい。もうじき、たつぷり会える。

三人の男達は、黒いセダンに乗り込むと、闇の向こうへ走り去った。

祐二とアニナは顔を見合わせた。ゴー・サイン。

すばやく隣のビルの階段を駆け下りた。

アニナが階段上をうかがう後ろで、祐二は皮のウォレットを開いた。それは財布ではなく開くとピッキングの道具が並んでいる。太さの違う棒、先の曲がった棒。どれも細いそれらの棒から、二本を選び鍵穴に差し込む。実は初めてだ。

大丈夫だ。自分に言い聞かせる。時間は充分ある。人が来る心配もない。落ちついてゆっくりやればいい。シリンダー錠のやり方は友達から今までに何度も聞いている。やって出来ないことはない。

「どう？ ユウ」ふりかえらずアニナが聞く。

「うん。ちょっと暗い。懐中電灯で手元を照らしてくれ」

アニナは懐中電灯を出した。鍵穴に向けて照らす。もし、祐二がやつても駄目だったら、拳銃でぶち壊す。そう思ったときだった。

カチャ。

乾いた音をたてて鍵が開いた。

祐二が得意げな顔をしてみせた。

シーン16 地下室

アニナは、オーク材の重たい扉をゆっくりと開き、奥に広がる闇のなかへ一歩踏み出した。懐中電灯でなかを照らす。走る懐中電灯の光でさえも、その部屋の異常性が見て取れた。

床にあるのはおどろおどろしい赤い文字。整然と並べられた猫の首とカラスの首。

「ユウ、ライトのスイッチは何処」

「今、捜している」入り口脇を照らして調べる祐二。あった、これだとスイッチを入れた。その瞬間、二人は息を飲んだ。

もとはラウンジか何かだったのだろうか。だが、ソファやテーブルは全て取り払われ一切無い。だだっ広いがらんだこの空間が広がっている。カーペットも壁紙もはがされて、むき出しのコンクリの床と壁には恐ろしげなシミが文様を描いている。

おびただしい数のろうそく。祭壇らしきものがあり、赤い血を満たしたグラスがふたつ。床には赤い魔法円。それを取り囲むように整然と並べられた猫とカラスの首。耳を澄ませば地獄の悪鬼のうめき声が地の底から聞こえてくる。

うひゃあ。こりゃ、マジでやばい。祐二は及び腰になった。この部屋の主は気が狂っているとしたか思えない。しかしアニナの様子を見れば、怯むことなく敢然と立ち、無言で部屋の細かいところまで目を走らせている。

「アモンね」唐突に言われて戸惑った。

「魔法円の中のアルファベットを見て。AMONと書いてあるわ」そう言われたが、祐二にはそれがアルファベットには見えない。

奇妙な書体の不気味な文字。アニナも、父に言われてしびしび読んだグリモアの知識が無ければ、分からなかっただろう。素直に父に感謝した。ソロモンの七十二霊くらい知っておかなければならないのだ。デーモンをあらわすアルファベットも。

「アモンって、あのデビルマンの勇者アモンか？」

「何？ それ」そりゃ、そうだ。アニナに日本のテレビアニメの話をして意味が通じるわけがない。

「日本の昔の漫画のヒーローだ」と説明した。すると、ヒーローなんてとんでもないと答えが返ってきた。

「アモンはソロモン七十二霊に名を連ねる悪魔で、地獄の公爵にあたる。古典的には巨大な鳥の頭を持つ姿で現れるという。コラン・ド・プランシーの地獄図鑑には狼の体に腰から後ろは蛇の姿のイラストが描かれているわ」

そりゃあ、随分とイメージが違うな。アモンがそんな格好じゃあ、がっかりだ。漫画家ってのは嘘つきなんだな。……今、そんなこと

はどうでもいい。

「つまり、アモンという悪魔を召還しようとしているの」奴らは。

「そうか。黒龍会を隠れ蓑に」

暴力団が悪魔を召還しようとしているなんて、馬鹿らしくて誰も考えないだろう。黒龍会自体が、コレにどれほど関わっているか疑わしい。多分、組長も知らないんじゃないか。エルゼルと洑上に、うまく利用されているとは思えない。極道って奴はシノギさえたつぷりあげてりや可愛がられるもんな。

「で、どうなんだろう。うまくいったのかな」

「何が？ 召還？」

「そう。それ」

「人間が悪魔を召還できるわけないわ。それは簡単じゃない筈。死者である洑上を司祭にしても。容易く悪魔が召還できるのなら、人類はとつくに滅んでいるわ」

なるほど。そういうモノなのか。

「問題は、その方法ね。ねえ。新宿では人が行方不明になっても騒動にはならないの」

「え？ そりゃあ、どうだろう。一人や二人消えても誰も気づかないかも。実際のところ、故郷から『消えて』新宿に来た人間なんて腐るほどいるし……どうして？」

「あれよ」

アニナは、部屋の隅に堆く積まれた衣類と靴を指し言った。祐二はそれを見て、アウシュビッツで虐殺された人々の遺品の写真を連想した。いやな予感。

「まさか、生贄とか……」

「どうかしら。ねえ。部屋はここひとつだけだと思う？」アニナは問い返した。

「どういう意味だ？」

アニナは質問には答えず、しかし何か思い当たることがあるのか、隠し扉がないか探してみましよう、と言った。

「隠し扉ねえ……」祐二は気持ち悪いのを堪えて、部屋の隅々を見てまわった。

「ここだわ」アニナが言った。思ったより簡単に見つかったのは、犯人に隠す意図がまったく無かったからか。

カウンターの奥に、四つんばいにならないと通れないくらいの小さな扉があった。

二人は顔を見合わせた。

祐二には、その扉を開けるのが躊躇われた。しかし、ここは男である自分が勇気を出して、最初に入るべきだ。と、手を伸ばしかけたとき、アニナがサツと扉を開いた。

とたんに鼻をつく異臭。そして、さっきから耳鳴りのように聞こえていた、地獄の亡者たちのうなり声、それが、はっきり聞こえた。なかは真つ暗だ。一筋の光も無い。

恐ろしいトンネル。祐二が躊躇っていると、アニナがさつさと中に入った。

おい、ちょっと待てよ。祐二があわてて後を追う。

入ってみると、立って歩けるほどの広さだった。懐中電灯で照らしてみると、コンクリの壁、ずっと奥まで続いている。電灯のスイッチらしきものは見当たらない。何しろ天井に照明器具らしきものが無い。

「進んでみる？」

「そうね」望ましくない回答だ。しかし、この場で他に選択肢はない。引き返すのが一番賢明だとは思うが、彼女が許すわけがない。

祐二はアニナの後ろについて進んだ。

唐突に、それは終わりをつげていた。突き当たりの壁。他には何も無い。しかし、異臭はますますひどく、うめき声は悲鳴に近い。

何も無いはずがないわ、アニナが呟いた。二人は懐中電灯の光で周囲を探る。そして、自分達の足の下に、マンホール状の鉄のふたを見つけた。

「なんだろう、コレ」

「開くかしら」

やってみよう。祐二はふたに手をかけた。思ったほどの重みもなく、また何の仕掛けもなく、ふたは持ち上がった。ガランガランと脇へ転がした。

目に刺さるような刺激臭と、地の底から沸きあがる亡者の声に、ア二ナと顔を見合わせ、懐中電灯を穴の中へ向けた。

「あっ！！」二人は息を飲み、同時に懐中電灯を取り落とした。闇の中へ飲み込まれてゆく懐中電灯。それは穴の底に落ちると一瞬で飲み込まれ、一筋の明かりもなくなった。真つ暗闇の中へ、二人は取り残された。そばには恐ろしい穴が口を開いたまま。

それは縦坑だった。その底にはウジ。ウジの海。その中で何人もの人の顔が、手が、足が、浮かんでは沈みを繰り返していた。人が口を開けばそこからも大量のウジが溢れ出る。恐ろしい悲鳴を上げ再び飲み込まれ沈んでいく。それが、懐中電灯の光に、一瞬だけ照らし出された世界。

なんだっ、コレはっ！！ 思考は停止している。その言葉だけが頭のなかに鳴り響く。今見た光景が、悪夢のごとく幾度も脳裏に蘇る。

声を出せたのはア二ナが先だった。

「戻りましょう」

そ、そ、そうだ。戻ろう。戻らなきゃ。祐二はゆっくりと穴があるとされる方向から後退った。前後左右だけでなく、上下の感覚も怪しい暗闇のなかだ。間違えてあの穴の中に落ちたら……？ 考えるだけでもぞつとした。

「後ろって、こっちだよな」ア二ナに聞いた。

「わたしもそうだと思う」闇のなか、すぐそばで声が返ってきた。ほんのわずか安心できた。

二人は這いながら、ゆっくりと慎重に引き返した。心のなかには焦っている。走って逃げたい。蓋を開けたままのあの穴から、悪夢のようなアレが溢れ出して、背後から迫ってくるのでは、と感じた。

そんなはずはない、と思っても、恐怖に鷲掴みされた心は悪夢を思い描く。

ようやく、入り口の光が見えた。闇のなか、お互いの輪郭がおぼろに見える。祐二はアニナの手をとって立ち上がり、出口へ急いだ。アニナを先に出すと、自分も身がかがめて出て、扉をしっかりと閉め、その場にへたり込んだ。

狂気の様店内が、この世に見える。アレは地獄の蓋だった。

「なんだったんだ。アレは……」まだ、声が震えている。

アニナにはわかつているらしい。大きく息をついて、言った。

「奴らは、生きている人間を媒体に、アモンを呼び降ろそうとしている。アレは、失敗して悪霊や餓鬼が取り付いた者達だ。死なず、ウジに喰らわれるままになっている」

そのあと、しばらく、二人とも何も言えなかった。

「つまり、奴らは……、新宿で人間をさらってきては、薬で眠らせるかなにかして、この部屋でアモンをその体に憑依させようとしている。そして、失敗して低級霊に取り付かれた人々を、片っ端からあの穴の中へ捨てているんだ」

なんてこった。……それじゃ、俺の顔見知りもあの中にいるかも知れない。毎晩うつっていた女の子が、ある日突然姿を消したなんてよくある話だ。家に帰ったんだろくらいにしか、みんな思わない。

「行こう。ユウ。ここを出よう」残念だけど、わたしには何もできない。

「洩上のいる事務所へ連れて行って」

これ以上、好きにはさせない。

シーン17〜18

シーン17 黒龍会事務所

六階建ての小さなビル。テナントはスナックやバーばかり。最上階はオーナーズ・ルームだ。

その場所を突き止めるのは、祐二でも容易ではなかった。

外国人が出入りしている黒龍会の事務所を捜せばいい。最初は簡単に考えていた。が、彼の知っている三つの事務所にその気配はなかった。そうして、困惑したときこのビルを思い出したのだ。

ここは黒龍会が汚い手を使って手に入れたビル。転売する予定だろうが、元のオーナーは追い出され、最上階は空いている筈。ひよっとしたらと思って見にきたらビンゴだった。黒いセダンが停まり、なかから三人の外国人が現れエレベーターへ消えていった。祐二はすばやく近寄り、エレベーターの停止した階を確認した。六階。ビンゴ。すぐに離れてさらに様子を見てみると、二人の外国人と一人の日本人が降りてきた。多分、アレが瀧上。それから急ぎ先回りして、例の雑居ビル前で見張っていると、今見た黒いセダンが停まり、さっきの日本人と外人二人が地下へ入って行ったのだ。だから、もう、間違いない。

説明を聞いてアニナは言った。

「ありがとう。ユウ。ここから先はわたし一人で行く」

なかで撃ち合いになるのは確実だ。ここまで手伝ってもらっただけでも充分だ。これ以上、巻き込むわけにはいかない。死なせるわけにはいかない。

「そう……だな……」

祐二の思いは複雑だ。ここで引いては日本男児の名がすたる、などとは思わないが、この先ついていっても、足手まといになるのは目に見えている。彼女一人を行かせたくないが、自分は何の役にも立たない。

「表で待っているから」

エレベーターの前で言った。アニナは無言で微笑んだ。エレベーターの扉が閉まった。昇っていく。

階数表示が六階で停まるのを確認して、祐二は表に出た。電柱に寄りかかり、上を見上げる。

「ここでさよならなんて、無しだよな？」呟いた。

エレベーターを降りた。回廊があるが入り口はひとつだ。扉、右上に監視カメラがある。ポケットに手をつ込み、ガムを噛みながら呼び鈴を押した。

さあ、早く出てきて頂戴。地球の裏側に逃げたってこうして見つけ出してやるわ。悪魔崇拝者とバンパイアは。

ドアノブがまわる。ガチャ。扉が開く。スローモーションに見える。

「お前。何の用だ」金髪の男が顔をのぞかせた。

その額に九ミリ弾を撃ち込んだ。深夜の繁華街に響き渡る銃声。挨拶はなしだ。両手に拳銃を持ち、倒れた男をまたいで中に入った。廊下。両サイドに扉。奥に扉。土足で踏み込んだ。

奥の扉が開き二人の男が出てきた。二発で倒した。人間の的は、彼女には簡単だ。左右の扉が同時に開いた。両腕をばつと広げ、気配に銃弾を撃ち込む。顔は正面を向いたまま。目の端で倒れる男の姿を確認する。

奥の扉に片手の銃を向けたまま、今開いた扉の奥を見る。普通の部屋。人の姿はもうない。足元に転がっている。エルゼルの人間を殺すことに躊躇いはない。主戦場は奥の部屋だ。

耳元の血管が大きく脈打つ。頭に血がのぼり、頬は紅潮し、眸はつりあがる。冷静ではない。突入だ。

倒れている男の襟首とベルトをつかみ、大きく振り子のように前後に反動をつけ、部屋の中に投げ込んだ。

響き渡る銃声。数発の銃弾が飛んできて、投げ込まれた男の体を

撃ち抜いた。全て右方向から。

さあ、次はわたしの番だ。

両手に銃をかまえ、勢い良く助走をつけ、部屋の中へ躍りこんだ。床に手をつかない側転。着地と同時にさらに勢い良く床を蹴り、もう一回転。いつせいに轟く銃声。だが、敵は彼女の動きについてきていない。逆に、彼女の眸は回転しながらも、敵の姿を捉えていた。着地と同時に四発の銃弾を放った。四人の男が倒れた。

リビングは広い。20平米はあるかも。大きな絵。熱帯魚の水槽。立派なマホガニーの机。その奥に座る長髪の日本人。いやらしい笑みを浮かべている。黒いスーツ姿、首に黒い石のペンダント。アナには、その石がなにか、すぐにわかった。

一瞥して見て取ると、応接セットのソファの陰に踊りこんだ。ソファが被弾する。残る男は五人。いや、四人。ひとり人間じゃない。

深夜の繁華街の喧騒の奥で、しかしはっきりと銃声が聞こえた。

祐二は不安な目をビルの上に向ける。

「大丈夫だよな……」そう呟いてみたものの、全然大丈夫な気はしなかった。

この狭い通りは人通りが少ない。まばらな人影が暗闇のなかにある。それでも皆銃声に気付いたようだ。上を見上げている。携帯を取り出した奴もいる。

急げよ。すぐに警察が来る。

床に転がっているのは全て死体。

重厚なマホガニーの机をはさんで対峙するのは、銃をかまえた少女と長髪の死者。

「面白い。貴様、イリア・サロニケか？」死者瀏上が口を開く。言葉とともに冷気を吐く。

「瀏上、サロニケの家名において貴様を倒す」深くかぶった帽子の

下から炯眼鋭く敵を見る。

「ふっふっふっ。子供をよこしたか。貴様、あの男の娘だな。俺に敵うと思うのか。あの男は為すすべなく殺されたぞ。貴様もなぶり殺してくれる。いや、生きたままウジに食らわせてやる。貴様の勇気をたたえ名前を聞いてやろう。貴様の名は」 淵上は饒舌だ。動揺させるつもりか。そんな手には乗らない。

「アニナ」短く答えた。

「では、アニナ。今日が貴様の最後の夜だ。たっぷりと後悔するがいい」

不敵な笑みを返す。

「最後の夜は貴様だ、淵上。父の仇、そして罪なき人々を地獄へ導いた報いを今受けよ。炎の湖で永遠に焼かれるがいい」

死人は高笑いした。悪魔の嘲笑。アニナはオートマティックの銃口を向けた。

しかし。

コンマ五秒後が見えた。

「貴様、避けないな」そう。彼女の目には、銃弾を浴びてびくともしない男の姿が見えた。

悪魔の冷笑。

「お前の父も、銃で俺が倒せると思っていた。親娘そろって間抜けな奴らだ。父から何も聞いてないのか。さあ、撃ってみろ」

撃ってやる。お望みどおり。貴様が高位のバンパイアであることは百も承知だ。銃弾が効かないことくらい想定内だ。

彼女は撃った。二発の銃弾は淵上の額に当たると皮下に飲みこまれた。跡に何の痕跡も残さず。続けて放った四発の銃弾も淵上の体に飲みこまれた。着弾の衝撃もない。淵上は不敵に立ったままだ。

「どうだ？ サロニケ。これが俺の力だ。どうやって俺を倒す」 淵上の指先が鉛色に変わり鋭くのびた。

糞っ。アニナは毒づくともミニ・ウージーに持ち替えた。

爪先鋭く襲い来た。紙一重でかわす。蹴りを放つ。

バンパイアは敏捷だ。放ったその蹴りを手刀で打ち払った。体勢が崩れた。が、身がかがめその姿勢から後ろ回し蹴り。コンバットブーツが敵の背を打った。が、びくともしない。余裕で振り返る。その振り返った顔へ銃持った腕で肘うちをくらわせようとした。が、あごにヒットする寸前、瀏上の手がその肘をとらえた。

「くっ」

ダンッ。壁まで吹っ飛ばされた。頭部を強く打って床に倒れた。即座に立ち上がるうとしたが軽い脳震盪だ。くらくらする。

チカチカする視界にゆっくりとバンパイアが現れた。無抵抗の彼女の喉をつかみ壁に押し付け立たせる。鋭い爪に、首筋が切れ、血が流れた。

「サロニケも貴様で終わりだな」死人はふっと笑った。

「サロニケに生まれた不運を地獄で嘆くがいい」

このまま鋭い爪で握りつぶせば彼女の首は落ちる。絶体絶命。

弾を飲み込む。なら、窒息するがいい。

両手のミニ・ウージーを瀏上の喉に押し当て引き金を引き続けた。銃弾がプスプスプスと喉に飲み込まれていく。同時に見る見る喉が膨らんでいく。全弾撃ちつくした時、瀏上は「があ」となりその身がかがめた。その顎下は喉を膨らませた蛙のようになっていた。アニナは素早く身を翻した。撤退だ。この隙に。悔しいが敵わない。

瀏上はげげげと銃弾を吐き出している。おみやげだ。高々と足をふりあげると、ブーツの踵を後頭部に叩き込んだ。その首にかけたペンダントを引き千切ると、ふりかえらず脱兎のごとく部屋を脱出した。非常階段を駆け下りる。遠くサイレンの音が聞こえる。

一階。柵を跳び越えた。野次馬が大勢いた。血まみれで飛び出してきた少女を驚きの目で見える。

「こっちだ」腕をつかまれた。祐二だ。

野次馬は何事が起こったのか、まだ理解できていない。サイレンが角を曲がった。ヘッドライトが、そして回転灯がくるくると現場

を照らしだす。

ふたりは脱兎のごとくその場を逃げ出した。すぐに細い路地に入る。そしてまた細い路地へ。暗い駐車場を突っ切る。柵を乗り越えまた細い路地へ。

全て道を知り尽くした祐二だから出来たことだ。

「ここを出れば大通りだ」人ごみに紛れ込もう。

「その前にＴシャツを脱げ」人影のないビルのエントランスで祐二は言った。ジャケットの返り血はそれほど目立たない。夜のネオンライトでは。しかし白いＴシャツにべっとりついた血糊は隠しようがない。祐二は自分のＴシャツを脱ぎランニング姿になった。渡されたＴシャツをアニナは素早く着た。祐二はランニングの上にフィールドジャケットをはおった。

「行こう」逃げ切れる。

まさか逃げ切れるとは祐二も思っていなかった。ふたりは大通りへ出た。深夜というのに祭りのような人ごみの中に紛れ込んだ。

シーン１８ 大通り

すごい人の数だ。アニナは吃驚していた。真夜中なのに。

「祭りでもあるのか」

「毎晩こうだよ」祐二が答えた。これだけいれば、フェスティバルが出来る。アニナは思った。もったいない。ただうろつくだけなんて。

こんな雑踏のなかでは、祐二だつて見知った顔は少ない。油断していた。路駐しているバスがあった。大型のキャンピングカーもどき。

前方にそれが見えたとき、祐二の顔が青ざめた。サツと血の気が引いて体が硬直する。踵を返して別の道へ行こうとしたとき、

「よう、祐二ちゃん。何処にいたんだよ」

「心配したぜえ。もっともお前じゃなくてガンジャのほうだけだな」ドレッドヘアと長髪のふたりの男に捕まった。

「なんだ？ こいつらは？」ア二ナが聞いた。勿論英語だ。

「ガンジャグループだよ。マジやべえ。俺あ、良くてリンチだ」

「撃つていいのか？」ア二ナがジャケットの内側に手をいれた。

「馬鹿。いいわけないだろう」

「なにを英語でくつちゃべってる？」男の一人が苛々して言った。

ア二ナは余裕の笑みを見せた。

「撃たなければいいわけだな」寸隙、高々とふりあげた右足を、祐二をつかんでいる男の腕にぶち込んだ。

「なっ！！」と言った瞬間には三百六十度回転しての後ろ回し蹴りが男の顎にヒットした。男は吹っ飛んだ。もう、立てないみたいだ。あつけない。

もうひとりの男が後ろから羽交い絞めにした。もがき肘を腹にぶち込む。だが、すぐに彼女の体は開放された。祐二が落ちていた鉄パイプで男の頭を殴ったのだ。

「楽勝じゃないか」とはア二ナ。

「ガンジャとヘロイン漬けたからな」と祐二。既にその場には人ばかり。野次馬にぐるりと取り囲まれていた。

しかも。

祐二がふりかえった時、キャンピングカーからもくもくと煙を吐きながら十人近い男が現れた。

「やばい。逃げよう」

「大丈夫だ。勝てる」悠長なことを言っているア二ナに、祐二は急いで説明した。

「そりゃ、奴らはガンジャ漬けで体力もない。けど、奴らのバックにいる奴らが問題なんだ。手出しすれば、次から次へと現れる。たちが悪い。とても勝ち目はない」

「なんだ。随分と卑怯なんだな」武士の国が聞いて呆れる。

「ああ、卑劣で陰湿で、ネット中坊と大差ない」

最後の説明はア二ナにはよく理解できなかったようだ。祐二は状況も状況ながらその説明を延々とした。

「生意気で調子こいてる礼儀知らずの奴らだよ。匿名だからね。本性が出るよ。とことん陰湿で卑劣で、どうせネットのなかだけしかでかい面できない奴らだ。知ってる大人は親と先公くらい。現実世界の人間関係も巧く構築できない奴が匿名世界にデビューするんだから、たまったもんじゃないぜ」

祐二は過去よっぽど腹立たしい目にあったのか延々まくしたてたが、そんな悠長に構えていられないようだ。既に取り囲まれているなかのリーダー格が口を開いた。

「祐二ちゃん。ちょっとお話しようや」口調は穏やかだが毒がある。この男は、棒有名暴力団の会長の妾腹の息子。やりたい放題の人生を歩んでいる。

「なんて言ったんだ？」アニナが通訳を求めた。

祐二は言葉の意味を正確に変換して伝えた。

「拉致、監禁して半殺しにするって」

アニナがにやりと笑った。

「そうか。それはひどい。助けてやる」オートマティックを構えた。えっ！？　ちよつと待て！！

と、思ったときには今口を開いた男の肩を撃ちぬいていた。男がもんどりうつて倒れた。

その場の空気が殺気だった。いや、全員あつけにとられ目をみはっている。

近くにいた間抜け面の男の顔面に後ろ回し蹴り。立て続けに隣りの男に中段後ろ蹴り。高々と足をふりあげ、かけ蹴り。一瞬で三人の男が地に倒れた。

やっと我に返った男どもがいつせいに罵声激しく襲い来た。

アニナはふり返るとオートマティックを連射した。全弾足を撃ちぬいている。

「イテエ、イテエ」と転がる男達を尻目に祐二はアニナの手をとり逃げ出した。

パトカーのサイレンが近い。それでなくてもこの近辺に集結して

いるのだ。

衆人環視のこのなかで、こんな派手な撃ち合い、ではない、一方的な射撃をしたのだ。逃げ延びるのはさっきよりも格段に難しい。「クソ、どけ」スクランブル交差点。行く手を阻む野次馬に体当たりをくらわしながら雑踏のなかを突き進んだ。

半分以上パニック状態だが、祐二の頭は必死で退路を考えている。路地へ逃げ込め。ビルの敷地を通り抜ける。路地から路地へ。そして、何処に隠れる？ 廃ビルか？ 空きテナントか？ 地下鉄は駄目だ。暗がりでも目立たないが、アニナは血だらけだ。クソ。何処へ逃げたらいいんだ？

シーン19〜24

シーン19 隠れ家

「なんだ。ここが一番安全だったな」今起こった一連の出来事を、頭のなかで整理しなければならないが、とりあえずそれは後回し。一服したい。

場所はアニナのホテル。何の問題もなく帰ってこれた。今までの出来事が別世界。セレブな空間に身を浸す。煙草をゆっくりふかし、大きく吐息をついた。

「はあ……。全ての出来事が頭のなかに蘇ってきた。シンナーでも吸って全てを忘れてえ……」。

とりあえず今は安全だ。少なくとも今夜は。だが、今のうちに対策と次策を考えておかないと、ラッキーで逮捕。悪くて東京湾。最悪でバンパイアに殺される。

「整理して考えよう」アニナが冷静に言った。

「エルゼルの奴らは全員殺した。あそこにいた奴らは全て」

「瀏上は」祐二が口を挟む。

「倒せなかった。奴は銃が効かない。もっともそれくらい予想していたけれど。思っていた以上の強敵だった」

「そうか……」

「逃げるのが精一杯だった」

「警察はどうだろう。瀏上を捕らえたかな」一抹の期待ともとれる祐二の言葉にアニナは自嘲気味に笑みをうかべ答えた。

「そんな間抜けじゃない。多分、警察が踏み込む前に逃げているはずだ」

「この件を整理しよう」祐二は言った。

「まず、瀏上を援護していた連中はなくなった。もっとも、瀏上にとっては痛くも痒くもないだろうけど、とりあえずあの場所で儀式は行えなくなったわけだ」あのおそろしい召還儀式は。

「どうかしら。浏上一人でもやるかもしれない。それはどっちもいえないわ。それより、今、何処に潜伏しているか。そっちのほうの問題ね」

「それは推理のしようがない」祐二はそう答えたが、黒龍会組長の自宅がちらりと頭に浮かんだ。以前客分でいたという。

「明日のニュースペーパーを待ちましよう。なにか警察がつかんでいるかもしれない。あの事務所から。例えば黒龍会と正体不明の外国人のつながりとか」

どうだろう。祐二は懐疑的だ。発表するだろうか？ 仮になにかつかんだとしても。警察も勿論そうだが、この国の新聞は保守的だ。腰砕けと言ってもいい

「次にあなたのお友達だけ」とアニナは愉快げに言った。

「気の毒だけど、多分警察に逮捕されてるはずよ」

祐二も納得せざるを得なかった。あいつらが大麻を持ってなかったなんて考えられない。はじめは被害者として運ばれても、ポケットや車内から大麻がざくざく出てくるはずだ。当分留置所暮らしだろう。

「出てきたら怖いけどね。俺は。お前が撃った男、あいつは大きな組の会長の息子なんだ。妾腹だけどね。俺は、見つかったら殺される」

「大丈夫。祐二を殺させはしない」

目が合った。一瞬の間。祐二は笑みを浮かべた。

「ありがとう。期待してるよ」

シーン20 黒龍会事務所

「ごろごろごろごろ、一体何人転がってやがる？」壮年の刑事檜崎は部下に聞いた。

「十四人です。全て外国人男性。パスポート等は現在捜していると
ころです」

血にまみれた黒龍会事務所。

「殺されたのは全て白人男性で、国籍は今のところ不明です。それから、この事務所には日本人男性が一人いたようです。住民の目撃証言があります」

日本人……？ そいつは逃げたのか？ それともいなかったのか？ そもそも黒龍会が外人とつるんでなにをやってやがった？

「警部。玄関口に防犯カメラが取り付け合ったのですが……」その警官は次の言葉を言いよんだ。

「おお。どうした？ 犯人が写っていたか？」

「はい」小さな声で一応うなずく警官。

「見てみよう」

警官の案内で小部屋に入った。モニターがある。警官がスイッチを入れた。再生。

「なんだこりゃあ！！」

目に入ったのは小さな外国人少女だった。少年のように野球帽をかぶり、ダボダボのミリタリージャケットに身を包み、ボトムは砂漠色の迷彩パンツ。その少女が、扉を開けた大男の額に銃弾を撃ちこんだ。そして扉の中へ消えた。

「こんな子供がこの事件の犯人だというのはか？」それは言われなくてもその場の誰もが感じている。

しかし、野次馬の証言と一致する。飛び出してきたのは血まみれの少女。誰もが口をそろえてそう言っていた。しかし、まさか犯人だとは思わなかった。当たり前だろう？ ここは泣く子も黙る黒龍会の事務所だ。なにかの理由で拉致され、必死で逃げ出してきた被害者だと思っていた。

「一番写りのいいカットをプリントアウトしろ」榎崎は言った。地取捜査だ。外国人少女だ。目立つ。きつと誰かが見ている。

シーン21 警察署

今日はまたまたクソ忙しいな。榎崎はぼやいた。今度は大麻不法所持だ。撃たれた奴は病院送りだが、怪我だけの奴の取調べが入っ

ている。まあ、もつとも、こいつらは全員麻薬Gメンの内偵が入っ
ていていづれにしても逮捕寸前だった。聞きたいことだけ聞いて後
は奴らに引き渡せばいいだけだ。

聞きたいことってのは勿論、奴らの麻薬取引先や売買ルートでは
なく、大立ち回りを演じた金髪少女のことだ。そして一緒にいた日
本人少年だ。

シーン22 銃弾

「で、瀏上はどうやって倒す？」聞いたのは祐二だ。しかし、アニ
ナも答えを持たない。

「十字架は効かない。聖水も効かない。太陽を浴びても大丈夫。銃
弾はきのう改めて効かないことを思い知らされた」

「銀の弾は」と祐二。

「迷信だ。そんなもの効かない」

祐二がため息をつき天を仰いだ。

「はあ。コレじゃバンパイアっていうより、無敵のモンスターだな」

「その通りだ」

「今まではどうやって倒していた？」そう。彼女はバンパイアスレ
イヤーだ。今まで出会ったバンパイアはどうやって始末していたの
か。

「これほど高位のバンパイアは初めてだ」そうでなければ父は殺さ
れない。言外にそう言った。

「はあ。万策つきたか……」祐二はまたもため息をつき、ポケット
から煙草を取り出した。火をつけようとしてうまくいかない。ガス
が切れている。

「ちえ。ガス切れだよ。あ、ジッポ持ってたよね。貸してくれる？」

アニナが父の形見のジッポを大事に持っていたことを思い出した。
受け取ったジッポはやけに重かった。気のせいだと思い火をつけよ
うとするが、やはりうまくいかない。

「駄目だ。これもガス切れだ」祐二はジッポをアニナに返そうとし

た。その時、カチンという音がした。普通そんな音はしない。中が空洞で何か入っている？

祐二はア二ナの顔をまじまじと見た。ア二ナも怪訝な顔をしている。

「気付かなかったのか？」

なにを？

「これ、何か入ってるぜ」そう言うと祐二はジッポの中を抜き出した。通常綿花が詰められている部分に三発の銃弾。

顔を見合わせるふたり。

祐二は意味がわからないでいる。だけど、なにかの理由がある。

ア二ナは瞬時に理解した。これは普通の銃弾ではない。パパだ。渊上を倒すためにパパが遺してくれた。

ア二ナは立ち上がった。

「渊上を倒せる」

携帯を手取る。電話した先はリチャード・ネルソン。

「リホルバーが欲しい」

シーン23 捜査一課

「少年の身元がわかった。野原祐二。十六歳。奴ら大麻グループの使い走りの小僧だ。三日前、仲間の大麻を二百グラム持ち逃げしたそうだ。お前達は聞き込みにまわってくれ」檜崎は部下に命じた。その時、彼の携帯が鳴った。

「警部、目撃証言がありました。例の外国人少女と少年です」

「ホントか？ 何処だ？」

「**通りのビルエントランスです。きのう深夜、ふたりでシンナーを吸っているところを見た人がいます」

「はあ！？ シンナー！？」

どう考えてもつながらなかった。黒龍会事務所に單身乗り込み十四人を殺害した驚くべき少女とシンナーが。

「とりあえず、そこへ行く。待機していてくれ」携帯を切った。

現場に向かいハンドルを握りながらふと気になったことがあった。二百グラムの大麻？ あの花け物がいた地下駐車場で見つかった大麻も二百グラム。

なんだ？ この事件は？ つながるとは限らない。しかし刑事の勘が何かを示唆していた。

シーン24 死者の石

「測上は何処にいると思う？」 思案顔でアニナは言った。

奴の居場所を見つけなければ話にならない。

「さっぱり見当がつかない」 祐二は答えたが、黒龍会組長の自宅が頭に浮かんだ。しかし言わなかった。地球上でもっとも避けたい場所だ。口にすれば、当然殴りこみに行く。アニナなら。

ソファから立ち上がり、軽く笑みを浮かべるとアニナは言った。

「あるいはわたしを殺しに来るかも」 意外なことを言い、窓外に目をやる。ありえないことではない。

「わたしはサロニケ。奴らの仇敵よ。このまま放っておくかしら？」 その可能性が低いことを祐二は祈ったが、その可能性は高い。

「このあと、奴のとする行動はみつっ」 アニナの推測だ。

「一つ目は、懲りずにアモン召還を試み続ける」

「ふたつ目は、わたしを殺しにやってくる」

「三つ目は、黒龍会に逃げ込んだとしても、あんな大事件の張本人黒龍会側もお荷物に感じるはずよ。早々に海外へ逃亡させる」

三番目が大賛成だ。海外へ逃亡して欲しい。祐二の思惑など何処吹く風、アニナは続けた。

「アモン召還が一番可能性低いわ。協力者なしに儀式は行えないし、それに無理に日本国内でやらなくても、逃亡先の海外でやればいいわ」

「じゃあ、ありがたい。このまま奴は海外へ高飛びだ」 笑顔になった祐二に、アニナはチャラリとペンダントをその手にぶらさげて見せた。あの時、逃げる間際、測上の首から引き千切った奴だ。

「なんだよ、それ？」銀の鎖に装飾のついた黒い石。

「死者の石。バンパイアのペンダントと呼ばれるもの。身に着けたバンパイア的能力を高める効果がある石」そんな石があるとは驚きだ。しかも奪ってきたなんて。

「すぐに捨てよう」と祐二。出来れば日本海溝に。

「駄目よ」とア二ナ。

「わたしを殺して、これを取り返しに来るはずよ」

だからだよ、って言っても無駄か……。祐二は頭を抱え込んだ。いつ襲われても不思議でない状況じゃないか。

「これは滅多にあるものじゃないの。ゲームで言えばレアアイテムね。バンパイアというバンパイアは、皆喉から手が出るほどこれを欲しがっているの。ううん。バンパイアだけじゃないわ……」

はぁ……。何処で買うんだ？ 魔法横町か？ で、杖とかフクロウも売ってんだ。ついでにバンパイアコロリみたいな殺虫剤は売ってないのか。

「瀏上の居場所を捜しだして始末するか、瀏上が襲ってくるのを待ち受けるか。どっちがいいと思う？」

聞くなよ。どっちだっていやだよ……。

シーン25〜29

シーン25 隣のビル

榎崎は車を降りた。場末の人通り少ない寂れたビル前。

なるほど。街中でシンナー遊びをするには丁度いい場所だ。

考えられる可能性はふたつ。ひとつ、シンナーをやっていた。もうひとつ、シンナーをやってるふりをして誰かを待っていた。

その誰かがターゲットだったのか？ 後をつけ黒龍会事務所にかちこんだ？ 少年、野原祐二の役割はなんだったんだ？ 黒龍会に殴りこんだのは少女ひとりだ。

車を降りた彼のもとに三人の部下が駆けつけた。

「聞き込みは無理だな」彼は言った。今は昼間だ。どの店も扉を閉ざしている。

「周辺を搜索してみよう」

榎崎は少女がいたというビルのエントランスに入っていった。地面に目を走らせる。何も無い。階段を上った。どの店も閉まっている。このビルの構造は、全階回廊になっていて、どの階からもエントランスを見下ろすことが出来る。ターゲットはこのどこかにいたのか？ 柵に手をかけ二階から下を見下ろす。想像してみる。あそこ、エントランスで、夜の暗闇の中シンナー遊びをしている少年と少女。いや。暗闇ではない。エントランスはライトアップされる。違うぞ。ターゲットはこのビルじゃなかった。そんな目立つ場所でターゲットを待ち受けるわけがない。ターゲットが店を出ればすぐに目に付く。

隣のビルだ。

階段を駆け下り、隣りのビルへ向かったとき、ある臭いに気付く足が止まった。微かだが。なじみのあるその臭い。腐敗臭……。

隣のビルの地下テナント、真っ暗な階段下を見た。

シーン26 フロント

アニナが逗留しているホテルのフロントに、若い刑事がやってきて、防犯カメラに写った写真を見せた。

「この少女がこちらに泊まっていますか？」

受け取るうとした若いフロント係を制して、白髪の支配人が写真を手に取った。

しばし目を凝らし見た後、

「残念ですが当ホテルのお客様ではないようです」と答えた。

「そうですか」若い刑事は、少し落胆した色を見せ、協力ありがとうございましたと言うと帰っていった。

白髪の老人がその後姿を見送る。

彼らはローマ法王庁からの客なのだ。こんなことは今までにも何度もあったことだ。

シーン27 瀏上

大音響とともに全面の窓ガラスが吹き飛んだ。欠片が宙を舞い散る。吹き込む強風。事態を把握できずに床に伏せるアニナと祐二。はためくカーテン。ふたりが顔を上げると。

そこに立っていたのは、黒いコートをはためかせた、蠱惑的な目の長髪の死者瀏上。挑戦的な笑みを浮かべると一歩足を踏み出した。チャリ。ガラス片が音をたてる。

「死者の石を返してもらおう」そう言った。

まずい。オートマティックもMP-5もホルスターごとベッドルームだ。そばにあるのはショットガンだけ。アニナはショットガンに手をかけた。

「無駄だ」即座に死人は言った。

その通りだ。例の銃弾もリホルバーがなければ使えない。今は手も足も出ない。

「さあ。返してもらおう」

「嫌だと言ったら？」

「殺して奪うだけだ」

アニナはペンダントをポケットから出した。バンパイアが近づいてくる。ガラス片踏みしめながら。すぐそばまで来ると、アニナの手から死者の石を奪い取った。そして言った。「決着をつけよう。今夜西戸崎埠頭の三番倉庫で待っている。黒龍会所有の倉庫だ。誰にも邪魔されない」ふっ、と笑みを付け加えた。「望むところだわ」

アニナの返事を聞くと、再びふっと嘲りの笑みを浮かべ、ゆつくりと窓際へさがった。

「待っている」

そう言つと、身を翻し窓の外へ飛び降りた。

あわてて下をのぞく祐二とアニナ。

バンパイアは駐車してあった車のルーフを大破させて着地すると、驚く人々を尻目にそのまま駆け去っていった。

「なんだよ、アレ」ようやく口がきけるようになった祐二。

「あんなの化け物ジャン」今更なに言ってるのかしら、この人はアニナは祐二を一瞥すると、窓際から離れた。

決戦の準備だ。サングラスをかけた。

シーン28 召還の部屋

老ビル入り口に一面ブルーシートがはられた。警察関係者以外誰も入れない。投光器が幾台も持ち込まれた。鑑識の人間が何人も入った。

こんな恐ろしい現場は誰もがはじめてだった。

部屋の真ん中で檜崎は呟いた。

「なんなんだ、ここは」

血の満たされたグラス、床の召還円、奇妙な記号、猫とからすの首。

それに絶え間なく聞こえる小さな音。地獄の亡者どものうめき声。「警部」カウンターの影で警官が叫んだ。

「隠し扉と、その奥に通路のようなものがあります」

シーン29 フロント

「窓ガラスが割れてしまった。すまない。支払いはわたしが……」
フロントでその旨申し出ると、白髪の老人は全て心得ている、といった口調で、

「ローマ法王庁のほうへ請求書を送らせてもらいます。このようなケースではいつもそうしておりますので」と言った。

それから大事そうに郵便物を取り出し、アニナに渡した。

「お荷物が届いております」

封筒だった。底が膨らんでいる。上から触っただけでコインロッカーのキーだとわかった。リチャード・ネルソンからだ。

「ありがとう。待っていた」アニナは微笑み礼を言うと、ルームキーを渡し、

「今夜は多分帰らないと思う」と言った。

「かしこまりました」老人の声を背に、駆けるような勢いで歩きはじめた。

「おい、ちょっと。待ててば」祐二があわてて後を追う。
そのふたりの後姿に白髪の老人は呟いた。「ご武運を」

シーン30～31

シーン30 地獄のふた

誰もがその光景に我が目を疑った。

「おい、大丈夫か？」下に向かって投げられた場違いなその言葉は、職務意識から出たものだ。アレが何らかの犯罪被害者であれば救出せねばならない。とても、そうは見えないのに。職務意識が目の前にある現実にはフィルターをかけている。

後ろのほうにいる人間は状況が把握できない。順繰りに交替して穴の中をのぞいて行つては吐き気を堪えている。

縄梯子が下ろされた。

「おい、自力で上がれるか？」動いている以上相手は生きていると想定して声をかけている。

「警部、自分が降りていつて救助します」若い警官が檜崎にそう言つたときだった。

幽鬼さながらの姿のそれが、縄梯子をしっかりとつかみのぼりはじめた。

やがて、その姿が明瞭になると、警官たちは、思わず後ずさりした。檜崎は必死で後ろにいる者たちに、下がれ、下がれ、と手で合図を送った。誰一人口をきけない。

警官たちが後ずさつたその場所に、穴のふちに手をかけて、それが姿を現した。ゆつくりと、立ち上がろうとしている。

ごぼごぼと、口から大量のウジを吐き出した。顔を上げれば唇は腐り落ちており、歯茎と歯だけが残っている。くぼんだ眼窩の片方は、確実にウジが詰まっている。真っ白い生気ない肌。細いがりがりの体。

誰一人、一言も発することができない。

ゆつくりと、近づいてくる。

体のところどころが破れ、そこからウジが流れ落ちている。

ずり、ずり、と足をひきずり、時折床に片手をついて、それは迫ってくる。

「警部、発砲許可を……」なかにいた一番冷静な警官が檜崎に言った。

檜崎は返事ができない。判断しようがない。コレが映画のなかから迷わず発砲。

「全員銃を抜け」責任は俺が取ればいい。

「いつでも発砲できる体勢で後退」

ようやく入り口にたどり着いた。焦りながらもゆっくりと確実に一人ずつ通路から出て、最後の一人が出終わった。全員銃口は穴に向けている。

撃つのか？ アレを？ アレはなんなんだ？ 許されることなのか？ 職務内のことなのか？ コレが。誰の頭も混乱している。

やがて、穴の中からアレが姿をあらわした。

今や完全に明るい光のなかにその恐ろしい姿をさらした。

「糞っ」耐え切れなくなった一人が思わず引き金を引いてしまった。つられて六人が発砲した。檜崎は叫んだ。

「まだだっ！！ まだ発砲するなっ！！」しかし既に、五発の銃弾が化け物を射抜いていた。貫通した弾は組織を大きく破壊して抜けていつている。しかし、化け物はまだ立ったままだ。そばにいた警官に襲い掛かるうとしている。

「発砲っ！！」今度こそ本当に撃て。撃て。

十八発の銃弾が化け物の体のいたるところに大穴を空けて、ようやくそれは動かなくなった。

しかし、誰も一言もしゃべることができないでいた。

アレは、司法解剖にまわせるのだろうか？ 檜崎が麻痺した頭でぼんやり考えていたとき、穴を覗き込んでいた警官が声をあげた。

「警部、アレが少なくとも三体、こちらに向かっています」

縄梯子を伝って次々のぼってきたか。

「全員配置につき発砲準備」その判断が正しいのかどうか、いまだ

檜崎はわからない。わからないけれどもできることは、いや、やらなければならぬことは、穴の出口正面に陣取り、出てくる奴を片っ端から倒すことだ。

シーン31 コインロッカー

何処までもコインロッカーの壁が続いている。ア二ナと祐二は手元のキーと同じナンバーのロッカーを探してずっと歩いている。だから、後ろから尾行されていることに、気付いていない。

「あつた。コレだ」ア二ナが見つけた無邪気な笑みを見せる。

なかにあつた紙袋を取り出す。紙袋の中身はずしりと重そうだ。即座にバッグに入れた。

それからふたりは連れ立って歩き、ア二ナが祐二に目配せして、ア二ナは女性用トイレの個室に消えた。

ア二ナは個室の中で、二丁のリホルバーを取り出す。合格だ。口径も一致する。

一丁に一発の銃弾を込め、もう一丁に二発の銃弾を込め上着のポケットに入れた。奴に見抜かれれば、一発目は無駄玉になる。勝負を決めるのは二発目の銃弾。スナブノーズと呼ばれるそれ（銃身の短いリホルバー）は、大きなポケットに難なく収まった。

何食わぬ顔でトイレから出ると、祐二と合流した。

さあ、行こう。これから。測上退治に。

ふたりは駅構内を抜け、タクシー乗り場沿いに歩いていた。その時、一台の真っ黒いベンツが後ろからスツと来て止まった。

同時に両脇をふたりから捉えられた。黒いスーツ姿の極道四人にあつと言う間もなくベンツの中に拉致された。後席にア二ナと祐二を挟んで屈強そうな男ふたりが座った。一人が助手席に乗ると車は発進した。残った一人の男は携帯で連絡を取っている様子だった。

「ちよ、ちよっとどういことですか？ 人違いじゃ？」祐二があわてて口早に話す。身に覚えが無いと言わんばかりのそぶり。それに対し、どすの利いた声で、

「あはたれ、われがきのう撃ったじやろうが。それでうちの会長が頭にきとんのや」と助手席の男が返す。痛いほどよく理由がわかった。

「なんだ？ こいつら」アニナが聞いた。

「井沢一家。ほら、ガンジャグループの奴撃った。老舗の暴力団の会長の息子」

「ああ、なるほど」

「英語でしゃべつとるなや」助手席からすこまれた。

しかし、彼らは油断していた。いや、なめていた。両脇に屈強な男をつけていたが、銃口を突きつけているわけでもない。こんなガキに小娘、拉致されたらがたがた震えるばかりで、何の抵抗も出来ないだろうとたかをくくっていたのだ。甘かった。確かに今まではそのように見えた。しかし次の瞬間思い知る間もなく死ぬこととなる。

「どうせ測上を退治したらやるつもりだったんだ」

「え？」唐突なセリフに思わず聞き返す祐二。しかし、それより速く。

アニナは両手にオートマティックを持つと腕を交差させてかまえ、両脇の男の喉から頭蓋骨に向けて撃ち抜き、「こんガキい」とふり返った助手席の男の額も撃ち抜き、運転手の首筋に銃口を押し付けた。

「おどれらあ、本気かあ！！」運転手の男が吼えた。

「こんなことしてただで済むと思うとるンかつ！！」

「会長のところへ連れてゆけ、そう伝えて」祐二は言われたが、それを先方に伝える前に、今先方が言ったことをなるべく正確にアニナに理解させるほうが先決だと思った。

「こんなことをしたら、俺達ふたりとも殺されることになる、と彼は言っている。ただでは済まない」と俺もそう思うと。

「だから会長のところへ連れて行かせる。はやく伝えて」

祐二は小さく十字を切った。どの道、この時点で死刑確定だモン

な。この先、どれほどだいそれたことしようとも、結果は同じなんだろう。

「俺達ふたりを会長のところへ連れて行け」

「あほだらあ。行つてどうするつもりじゃあ!？」

「それはお前の知ったことじゃない。お前はただの兵隊だ。これは俺たちと、会長の問題だ。彼女は言っている。すぐに引き金を弾いてもいいと。そしてナビに入力されている情報で俺が運転して行つてもいい。どうだ。会長に感謝されたければ俺たちを連れて行け」

「どういう意味だ」聞き返す男に、

「グダグダ言わずに、とつとと連れてけや」シートを思い切り蹴つた。どうだ。ここまで強気に出れば相手も疑い始めるはずだ。こっちのバックに相当な大物がいるんじゃないかと。

「ちい」男は舌を鳴らし、ハンドルを切った。思ったとおりだ。しかし、命懸けの演技力を要求されるなあ。後はア二ナが何処までやる気かだ。本気で会長をどうにかする気にいるのか？ そしたら後始末はどうする気だ？

シーン32〜34

シーン32 会長愛人宅

程なくして、車は超高級マンションの地下駐車場に停まった。運転席の男に銃を突きつけたまま三人車を降りた。入り口に向かう。

ここで男は抵抗を見せた。アニナに殴りかかったのだ。が、鋭いフックをかわし顎に上段蹴り。軽く飛び上がり返す刃のかけ蹴り。着地すると殴りかかる敵みぞおちに中段蹴り。急所攻撃に息をつけない敵鼻っ柱に鋭い肘うち、続けて銃の台尻をぶち込んだ。

敵は鼻を手で覆い、鼻血を流して座り込んだ。

その頭に再度銃口突きつけた。

「力で敵わない相手に追い詰められる気分はどう？」祐二はアニナが言っただまを伝えた。

すっかり牙を抜かれた男に銃口を突きつけたまま、エントランスルームまで案内させた。オートロック式マンションだ。愛人のマンションだろう。

「部屋まで案内しろ」祐二は言われたとおり伝えた。

男がルームナンバーを押す。インターフォンに女の声が出た。

「俺です。恒です。会長に会って話したいと例の小僧が」

どの程度まで正確に伝わったのだろう。自動ドアが開いた。

「会長に聞いて、良いと言えばすぐに貴様ら弾いてやる」不貞腐れた態度の男を先に歩かせエレベーターで昇っていく。目的の階にいた。

エレベーターを降りた男は一枚の扉の前でとまり呼び鈴を押した。チエーンキーが外され、すぐに扉が内側から開いた。

「おい。どうしたい、恒？」老人が顔を出した。

「会長、このガキどもが……」堰を切ったように話し始めた男の頭を、

「ご苦労」と言って撃った。崩れ落ちた男の体が扉をふさぐ。

老人はあつと言う間に奥へ逃げ去った。倒れた男を乗り越えてア二ナと祐二はなかへ入って行った。誰もいない。多分、愛人と会長だけ。

リビングへ入ったとき、老人が日本刀かざして襲い掛かってきた。日本刀の素晴らしさはア二ナもよく知っている。が。老人がふりおろす前に額を撃ち抜いた。

「ひいい」と悲鳴を上げている女に、テーブルの上にあった車のキーをチャリツと投げて渡した。

「これからわたし達を会長の自宅へ連れて行け」女は多少の英語は解るようだ。コクンコクンとうなずいた。

「さてと。祐二手伝え」と言って、ア二ナは会長の体をうつぶせにソファに乗せた。頭だけソファから飛び出る形で。

ア二ナは拳銃をホルスターへしまうと、さっきの日本刀を持ち出してきた。祐二はいやな予感がした。その通りだった。

気合一発ふりおろすと、老人の首がごろんと絨毯の上に転がった。悲鳴を上げる女。首の白髪引つつかむと、その女に向かって投げてよこした。女のひざにごろんと抱かれる格好になった。さらに悲鳴を上げる女。

さてと、これから井沢一家の総本山に乗り込むわけだ。たったふたりで。勿論、俺は何の役にも立たない。もう、何があつたって驚かないぞ。もし、今夜生き延びて、これから先長い人生あつたとしても、今夜ほど最低の夜はもうこないだろう。

シーン33 召還の部屋

榎崎を含め警官たちは、終わらない悪夢を見ているようだった。何体倒しても、後から後からアレが出てくる。数体倒した時点で、穴の周りから亡骸は片付けられ、部屋の中に片っ端から並べられている。もう、二十数体にのぼる。

応援が駆けつけた。警視庁には対策本部が立てられた。捜査本部ではない。対策本部だ。現時点だけで二十体以上もの死体袋を搬出

しなくてはならない。マスコミの目から隠して。

シーン34 井沢一家総本山

マンションの一室に二体の死体。駐車場に三体の死体の乗った車を残したまま、女の運転するベンツで井沢一家会長本宅へ向かう。首は助手席のシートにある。女は半べそかいている。震える手でハンドルを握っている。

アニナがバッグからショットガンを取り出し、祐二に渡した。

「自分の身が危ないときは、迷わず撃つて。いい？ あなたは、決して他人に危害を加えられる人間じゃない。だけど、そんな甘いことは言っていられない。今夜だけは。何も考えないで、撃つて」

解った、と銃を受け取った。腹が据わった。金玉に力が入ったようだ。足手まといにだけはならない。そう誓った。

「だけど」と祐二は聞いた。

「どうして、ここまでする？」どうしてここまでやる必要がある？ アニナは、銃口は女からそらさず、サングラス越しに祐二の目を見た。

「どっちにしても、洩上を始末したらやるつもりだった。きのう、わたしが撃った男、アレがユウのいたグループのリーダー格だろう。あの男の背景にこれだけのものがあつた。それだけの話だ。あの男を消しても、背後にこれだけのものがある。だから全部消してしまふ」

ひょっとして俺の？ 俺のためにこれだけのことをやるうつつのか？

「あの夜、ガンジャを落とさせたのは私の責任でもある。それに、洩上退治のお礼だ。先にやっておく。わたしなりの験かつぎだ」

それだけのために、これだけのことを……？

アニナは笑みをみせ言った。

「わたし達ふたりで、今夜を『伝説の夜』にしよう。ジャパニーズマフィアが震えあがる」

車が会長本宅に着いた。

立派な門構えだ。井沢一家は古い組だ。有名だが規模は大きくはない。あちこちに事務所を持ってはいない。つまり兵隊のほとんどがこの本宅にいる。

「リモコンで開くのか？」門のことだ。

「は、はい」女は従順だ。

「開け」

「はい」すぐにダッシュボードのリモコンを操作した。

ゆつくりと門が上がってゆく。

その先に滑り込んでゆく車。玄関先で停まった。

「首を持つて降りろ」アニナが女に命令した。

「ひ……はい」恐れながらも必死でそれを手に持ち女は車を降りた。祐二とアニナも降りた。

玄関が開き若い衆が出てきて駆け寄った。祐二は背筋の凍る思いだ。

「お疲れなさいまし。御用向きは？」

「投げろ」アニナが言った。女は泣きながらそれを玄関に向かって投げた。若い衆たちの背後に、会長の首がごろんと転がった。

誰も一言も発することが出来なかった。ふりかえり、一瞬の間。そして銃声だけが轟いた。

シーン34

アニナはそこに居た男全て撃ち殺していた。

「ひい……」女が泣きながら走って逃げていった。

アニナはミニ・ウージーに握り替えた。

なんだあ、いまのはっ！！ 屋敷の中から罵声が聞こえる。

雪駄を履いて上半身裸で手首まで刺青のある男たちがぞろぞろと出てきた。ほとんどの男が手首から足首まで刺青がある。

「オリエンタルでビューティフルだ」小さく呟くとサブマシンガンの引き金を弾いた。銃声が八発して八人の男が倒れた。嘘だろっ。

祐二は思った。サブマシンガンだぞ。一発ずつ狙い撃ってンのかよ。途切れ途切れならともかく、流れるような銃声だったぞ。どうしてそんな真似が出来るんだよ。

しかもアニナのそれは銃身の短いコンパクトタイプ。反動は大きく、自然手の中で暴れる。

「かちこみだあっ！！」

「何処の組じゃあ！！」

「チャ力持ってこおい！！」屋敷内が騒然となっている。

何が起こったか状況はわかったようだ。だが、いくら暴力団事務所でも拳銃がそこら辺にゴロゴロあるわけではない。大抵、手入れのときも大丈夫な場所に隠している。だからつまり、敵が拳銃を調達できるまでもうしばらく時間がかかるということ。

そして素敵なことに、彼らは襲撃者達がたったふたりだと見破ったようだ。しかもガキと小娘。

「おどれらあ、ぶち殺してやるわあ！！」怒鳴りながら何人もの男が飛び出してくる。と、同時に額を撃ち抜かれて倒れる。肉弾戦になれば分が悪い。あっと言う間にひきずり倒され殺られてしまうだろう。敵の手が届かない距離で倒さなければならぬ。

手に手にドスや日本刀ふりかざした極道が次々現れる。津波のよ

うに押しよせて来たが、最前列から順番に雪崩をつつて撃ち倒されていく。

「ユウ。弾切れ」片手のミニ・ウージーを祐二に素早く手渡す。ホテルの部屋で何度も練習した。祐二は手早くマガジンを交換するとア二ナに返す。

「もう一丁」そちらも同様にして返す。オーケイ、息もあっている。戦える。

応戦しながら死体の山を乗り越えて、邸内に入っていく。玄関に転がっていた会長の頭を邸内に投げ込む。再び起こる怒号。

長くてひろい廊下。行く手に極道の一団。パン、パン、拳銃の応戦があつた。ア二ナを掠めて背後に着弾する。

「ユウ、身を隠していて」彼女の目がつりあがっている。

彼女にはコンマ5秒後の弾道が見えている。だが、彼女の脳内ではどうやってその情報を処理しているのだろう。踊るように側転して銃弾をかわす。そして応戦し、再びかわす。彼女が応戦するたびに、確実に二人三人と倒れていく。

玄関口から回り込んできた男たちがいた。死体の山を乗り越え、鬼の形相でドスを手に。気付いたとき、祐二は撃っていた。反動は半端じゃない。けれど当たった。すぐさま、コッキングしてもう一発撃つ。祐二が渡されているショットガンは銃身内のチョーク（絞り）がゆるく散弾が広範囲にひろがる。だから経験のない祐二でも的に当てる事が出来る。

人を撃った。ショックだった。だが、深く考えている暇はない。まだ撃たなければ。

そうだった。ふりかえりア二ナの対峙している一団に向かって立て続けに撃った。大勢が被弾した。血まみれになって一団が崩れる。さらに追い討ちをかけるようにア二ナの銃弾が正確に額を撃ち抜いていく。

また、背後から一人。だが、もう祐二は落ちついて散弾をぶっ放す。すぐさま銃身下部のフォアエンドをスライドさせ次の敵に備える。

る。

気付いたとき、アニナの前には一人の敵もいなかった。

「行こう。ユウ」死体の上を歩いてゆくアニナ。その後を追いかける祐二。奥の部屋へ入ると女が一人いるだけだった。

さすが老舗の極道の女らしく、奇麗に髪を結い上げ着物を着て立っていた。

「あんた達はなに者だい？」静かに問う。

「わたしは、イリア・サロニケ」アニナが答える。

ふっふっふと女が笑い始める。

「あんた達のおかげで、井沢一家はおしまいだよ。……何処の組のさしがねだい？」

「無関係だ。自分の意志だ」

それを聞いて女は眼をぎろりと剥いた。

「無関係だつてえ！？ 一体なんだつてうちの組を」

「友達のためだ」簡潔に答えるアニナ。

「うちはかたぎの衆に迷惑かけるようなシノギはやっちゃいけないよ」

「運が悪かったんだ」

「運が……！？」

「わたしの前に立ったからだ」

女が着物のあわせから銃を抜いた。が、アニナのほうが早かった。

女は額を撃ち抜かれて倒れた。

「行くぞ、アニナ」はるか彼方、微かにパトカーのサイレンが聞こえてきた。

ダッシュで飛び出し、乗ってきたベンツに乗り込んだ。祐二がハンドルを握った。バックで急発進、門のところでウーターンすると夜の道に乗り出し、猛スピードで走り去った。入れ違いに、数台のパトカーが到着した。

シーン35～36

シーン35 召還の部屋

四十八体。全て片付け終わると、四十八体の遺体袋がそこに並んだ。こうしてみると、事件は大量殺人の様相を呈してきた。

檜崎はカウンターに腰掛けると煙草に火をつけた。現場保全上褒められた行為ではないが、ここは現場じゃねえ、戦場だ、煙草くらい吸わせろや、と大きく紫煙をくゆらせた。

アレのなかには腕時計や、ペンダントをしているものもいた。ひよっとしたら身元確認できるかもしれない。だが、遺族に渡してやれるのは遺骨だ。亡骸に、対面させることは出来ない。

さて、警視庁から呼ばれている。あの頭の固い連中に、どうやって説明してやればいいのか胃が痛い。任意出頭してもらって事情聴取できる相手がモノを見せるしかねえけどよ。カーペットの上を這い回っているウジを踏み潰した。

西戸崎埠頭

シーン36 車中

「ユウ、運転は？」大丈夫なのか？ とアニナの問い。

「ああ、まあ、オートマだし。なんとか」と、答えながらも、そんなことよりも、と言いたげな祐二。

「俺達、生きてるよな」何度も繰り返し小さくガッツポーズをする。「当たり前だ」とアニナ。後席で平然としている。

けれど、あの井沢一家に殴りこんで、無傷で生きてるんだ。いや、逆に壊滅させちゃったんだ。これが平気でいられるか、と声を震わせる祐二。

「けど、このあともっと最悪の相手と戦わなきゃいけない」

その一言で、一気に萎えた。そうだった……。忘れてた。洲上がまだだった。どちらかと言えば、こっちのほうがメインイベントだ。

五十数人の極道よりも最悪の相手だ。

「ユウ。井沢一家はどうなると思う」唐突にアニナに聞かれた。祐二は少し考え、自分の予想を言った。

「生き残った幹部がいたとしても、多分数人。どうにもならない状況だと思う。杯かわした組がどう動くかわからないけど、擁護しようもない状態だな。多分、周辺の暴力団に吸収されて終わりだと思う……」縄張りもしのぎも。

「そうか。理想的だな……」と、アニナ。祐二のひざにショットガンを置いた。

「弾を入れ替えておいた。散弾じゃなくて熊撃ち用の弾だ。威力はライフルくらいある。当たれば測上でもよろけるはず」

ひざに置かれたショットガンを左手で握りながら

「よ、よろけるのか……？」と聞いた。

「多分……」自信なさげなアニナの返答。

「至近距離で自分の身が危ないときは、使ってみて。必ず、銃口を相手に押し当ててね。でないと避けられるから」

「り、了解……」それで、うまくいけばよろけてくれるわけだ。

「ホントはユウを巻き込んだんじゃないかと思っっている。これはサロニケの戦いで、ユウは無関係な人間だ。だけど、さっき一緒に戦って感じた。仲間がいるってうまく言えないけど、とても良い。ずっと一人で戦ってきて、感じている」

「一緒に戦った、ってほどじゃないけどね」謙遜して見せたが事実もその通りだ。

けどまあ、俺も何かの役に立つんだ。少し誇らしくも感じた。俄然、やってやるうじゃねえかという気になった。根がお調子者だ。

行く手にガソリンスタンドが見えた。はるか手前で祐二は車を止めた。訝しげなアニナに「ちょっと待ってて」と言い残し、スタンドへ駆けていった。

「すみません」いかにも困っている風を装いスタンドの店員に言った。

「ガス欠しちゃって。十八リッタータンクとレギュラー十リッターください」

通常、こういう販売は禁止されている。しかし、ガス欠と言えば大抵売ってもらえる。

ついでに灯油ポンプも買つと精算して三千五百円払い戻ってきた。三千五百円。これで人類が救えるなら安いもんだ。

次にコンビニで停車し、瓶ビール二本買つてくると、中身を側溝に流してしまい、ポンプでなかにガソリンを入れ、再び栓をした。

「お前の弾が当たっても、まだ動いていたらぶっかけて焼いてやる」リュックに入れた。

「なるほど」

埠頭に着いた。三番倉庫前で車を降りる。海がうねっている。街灯と停船している船舶の灯りを映し。風が湿っぽい。

「行こう」彼女が言った。祐二は覚悟を決め、リュックを背負いシヨットガンを手にした。

シーン37〜38

シーン37 第三倉庫

ガラガラガラと大きな扉を開けた。真つ暗闇のなかに一步踏み出す。扉からの灯りで高く積まれた木箱がおぼろに浮かび上がる。

祐二は電灯のスイッチを探した。扉の脇の鉄骨にそのボックスがあった。スイッチを入れる。だが点かない。再度試みる。だが、電灯は点かない。懐中電灯で配線を追う。柱の上のほうで切られている。

「なるほどね」アニナが呟いた。この闇のなかで襲う気だ。

ふたり、目が闇に慣れるのを待つ。だが、圧倒的に敵に分がある。相手はバンパイアだ。夜目が利く。

祐二が懐中電灯の光を四方八方に走らせている。だが、何処にも敵の影はない。アニナが気付いた。格好の的になっている。

「ユウ、ライトを捨てて」言い終わる前に。

闇のなかを風が動いた。

「うわっ」と祐二がしゃがみこむ。その頭上の空間を鋭い爪が切り裂いた。銃声轟いた。祐二が撃つたのだ。だが、避けられた。アニナは撃とうとして銃口をさげた。今、撃てない。祐二に当たる。嘲笑を残し、バンパイアは再び闇のなかに身を潜めた。

アニナは敵の卑劣な作戦に気付いた。わたしの仲間を先に殺し、わたしの動揺を狙う気だ。

「ユウ、わたしから離れないで」言われなくても既にペタリとくっついている。

闇のなか再び襲い来た。狙いはやはり祐二だ。アニナは祐二の体をかばい突き飛ばした。祐二は床に転がった。鋭い爪がアニナを掠める。ミリタリージャンパーが大きく裂けた。オートマティックを立て続けに撃った。だが、敵は再び闇に消えた。

「そうかい。そういうつもりかい」祐二は立ち上がると膝の埃を払

った。こういう風に使うつもりじゃなかったんだけど。リュックにライターで火を点けた。化学繊維のそれはあつと言う間に燃え始めた。倉庫の奥深くめがけて放り投げた。破裂音。二本のビール瓶が砕け、次の瞬間ちよつとした爆発が起こった。なかのガソリンが引火したのだ。

「どうだっ」明々と照らされる倉庫内部。隅々まで目を走らせるが敵の姿はない。灯りが点つたことで、くつきりと明瞭になった闇。その何処かに身を潜めているに違いない。

ガソリンの火は木箱に燃え移った。徐々に広がっていく。

「ある程度炎が広がるのを待って、一気にかたをつけよう」逃げ場をなくす作戦。アニナが言って、二人はその場でしばらく待った。

「行こう。ユウ」もう充分だ。アニナは奥へ踏み込んだ。離れないようについて行く祐二。

炎の壁の中を駆ける二人。だが、阻まれた。高く積まれた木箱が崩落した。間一髪避ける二人。だが奥へ進めなくなった。燃え落ちた木箱が行く手を阻んでいる。

「まわりこもう」

既に火は充分燃え広がり、まるで炎の迷路の中にいるようだった。「ガスが出ている」頭を低くして、アニナが言った。だが、それでどうにかなる程度のものではなかった。祐二は既にたっぷりとガスを吸っていた。咳き込み涙が滲む目でその対決を見た。

アニナがスツと背を伸ばして立ち上がった。祐二は地面にはいつくばっている。顔を上げると黒いスーツ姿の死者淵上の姿が見えた。「死してなお、不当にこの世にある死人、淵上。この瞬間が、己が最後の時と知れ」燃えはぜる音のなかに、凜としたアニナの声が響き渡る。

対するは悪魔の嘲笑淵上。

「サロニケ。目障りな一族よ。非力な人間が何故我が行く手に立つ？」

「我が一族が非力かどうか、その身を持って知るが良い」

嘲笑う洩上。

「あの男の娘に何の力がある」

糞、俺も援護しなきゃ。祐二は思った。だが、一体自分に何ができる。洩上の頭上の天井を撃ちぬいた。スレートの欠片が降り注ぐ。小細工ではない。自分の横の壁を撃った。スレートに大穴が開いた。瞬間、新鮮な空気を吸い込む大穴。天井の穴からは真っ黒い煙が抜けていつている。大きく息を吸い込んで立ち上がった。

「二対一でもずるじゃねえよなあ」ショットガン銃身下部をコツキングして狙い定めた。

「そんなもので俺はしとめられぬ」ショットガンを見て洩上が嘲笑った。

「じゃあ、これならどうかしら」アニナは両手のオートマティックを捨て、腰のリホルバーを抜いた。洩上の顔色が変わった。

狙い定めた。コンマ五秒後が見えた。見抜かれた。奴は避ける。それがどうした。彼女にとってそれは問題ではない。

立て続けに響く二発の銃声。一発目を洩上が避け、その避けた額に二発目がのみこまれた。つぶれた弾頭からなかの化学物質が噴出す。それがバンパイアの血と反応する。次の瞬間。

洩上の頭部上半分が吹き飛んだ。鼻から上は吹き飛ばされ、口だけになった顔。飛び散った血でべっとりと濡れている。あ……がが……。その口が声をあげる。

「おのれ……。サロニケ……」

「へえ……。脳みそ吹き飛ばされてもしゃべれるのね。教えてあげる。これがサロニケに遺伝する力。代々お前達を滅ぼしてきた」

再び狙い定める。銃弾は後一発。見える。もう避けない。いや、避けられない。

銃弾は左胸にのみこまれていった。ボグッ。鈍い音をたて、胸板に大穴が開く。心臓を吹き飛ばした。最後だ。洩上。

「きい……」甲高い、猿のような声。

「きええいいい……しいいい」断末魔の叫び。

「ア、アアアモンよ、出だよ」ふらふらとおぼつかない足で、天を仰ぎ叫ぶ。

「我を助けよ。忠実なそなたのしもべを助けよ」血にまみれた口で叫ぶ。

「無駄よ。人間に悪魔は召還できない。地獄で会うといいわ。アモンに」

がくりと膝をつき、うつぶせに倒れた。それでもまだ呟き続けている。

「いいい……我に力を……」

アニナはゆつくりと近づくと、砕けた頭に足をかけ、首のペンダントを引きちぎった。

「お前に似合いなのは死だ」吐き捨てるように言った。

左側の炎の壁がゆつくりと倒れ掛かってきた。

「アニナ。危ない」祐二に手を引つ張られた。間一髪、崩落を避けた。が、淵上は炎の中に埋もれた。だがまだ、動いている。しかし、それも次第に緩慢となり、やがて止まった。

「出よう」祐二に促され、アニナはやつと目をそらした。さつき祐二がスレートにあけた大穴から脱出した。ふたりとも煤まみれだった。真っ黒な顔を見合わせ、笑みをかわした。

シーン38 第三倉庫

檜崎は間近でその焼死体を見た。頭を半分欠損し、胸に大穴の空いた真っ黒焦げの死体。表面の組織が炭化するほど激しく燃え尽きていた。なんだか、全てがわかった気がした。全ての謎が解けた。簡単だ。化け物退治に來た外国人少女がいたんだ。

で、化け物は退治した。ついでに非合法組織も幾つか壊滅させた。

謎は簡単だ。わからないことだらけだけれども。とにかく。もう、終わった。これだけは確かに言えることだ。刑事の勘だが。

港湾の倉庫群が朝日を浴びている。海は照り返して輝いている。一晩中地獄にいた彼には眩しい光景だった。

シーン39〜40

日本国際空港

シーン39 国道

国際空港へ向かうただっ広い道路の歩道を、ふたりは歩いていき交う車があるばかりで、何も無い道。ふたりともさつきから無言だ。

あのあと、アニナはミニ・ウージーとオートマテック、それからホルバーを海に捨てた。ショットガンは祐二が貰った。散弾なら日本でも手に入る。狩猟法に疎い彼でもそれくらいの知識はあった。いつかまた彼女に会いたい。その時は決して足手まといにはなりたくない。貰ったショットガンで射撃の練習をするつもりだった。それからもうひとつ。決心したことがあった。

「あのさ」

先に行くアニナの背に話しかけた。彼女がふり返る。

「あのさ。俺、エクソシスト（悪魔祓い師）になるよ。日本には陰陽道とか密教とかあるんだ。そこで修行する。そしたら、いつかまた、会えるよな。俺がエクソシストになれば」彼女はバンパイアスレイヤー。世界の何処かで再び出会える可能性はゼロではない。

「また、バンパイアを吹っ飛ばしてやるうぜ」微笑む彼に、

「きつと」と言うと、アニナは彼に抱きついた。Ｔシャツの胸で素早く涙を拭くと、少し背伸びして、彼の頬にキスした。

祐二は、これは彼女の国の挨拶みたいなものだ、と高鳴る胸を抑え、自分に言い聞かせた。

その手に、アニナはバンパイアのペンダントを握らせた。

「これは『死者の石』と呼ばれているけれど、悪魔のもたらす狂気や幻覚を防ぐ力もある。導師が使えばその力を強くする。貰って。きつとすごいエクソシストになって」

ふたりは体を寄せ合ったまま笑みを交わした。

「じゃあ、俺はここで。寂しくなるから空港までは見送らない」言葉とは裏腹に、その腕は彼女を引き止めたくてたまらない。

「わかった」アニナはそう言うのと体を離れた。

「全部、ユウのおかげだ。決して忘れない。ありがとう」

彼女にしてみれば、ここは世界の果ての国だ。二度と訪れることがあるとは思えない。祐二とは多分これが最後の別れになる。

名残惜しみゆつくりと歩き始めた。空港へ向かい。

ふり返りながら遠ざかるその姿を、ずっと、祐二は見ていた。

シーン40 機内 ファーストクラス

日本を飛び立つてすぐに、アニナは強い睡魔に襲われた。くたびれ果てていた。緊張も解けたのだ。無理もない。深い眠りに落ちていった。

そこで夢を見た。幼い頃から繰り返し見ている夢。

霧に包まれた深い森のなかに彼女はいて、奇麗な女の人がいる。

とても神々しくて女神のような女性。霧の奥には幾本もの巨大な塔がそびえたっている。そこまではいつも見ている夢と同じだ。

しかし、今日は、夢の中の女性が口を開いた。

「三年後、あなたは再びこの国を訪れる。エレボスを捜しに」

だが、夢はうつろい、しばらく後には、夢のことも、そんな夢を見たことも忘れて、眠りこけていた。

シーン39～40（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございました。

本編の主人公ふたりは「エト・エウトクタ」にて重要な役割を果たします。

「エト・エウトクタ」は現在執筆中です。

しばらくお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6836a/>

イリア・サロニケ（エト・エウトクタ外伝）

2010年10月8日15時51分発行